

山梨県北巨摩郡高根町

海道前遺跡  
青木遺跡

県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998. 3

高根町教育委員会  
山梨県峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡高根町

海道前遺跡  
青木遺跡

県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998. 3

高根町教育委員会  
山梨県峡北土地改良事務所

## 序 文

八ヶ岳南麓の豊かな自然に育まれた高根町は、広大な裾野に伸びやかに広がった青空と水と緑の高原の町として今日まで発展しております。

この発展の基盤には永い歴史と人類のたゆまぬ努力と英知の蓄積があり、その歴史も時代の推移とともに忘れられた部分が多いと思われます。

当町では昭和55年から農林水産省から補助金をいただき農業基盤整備事業の一環としては場整備事業を行ってまいりました。

これに伴い土地に埋もれた歴史＝埋蔵文化財の発掘調査が数多く行われ、大きな成果を上げております。

これらは、先人たちが大地に残してくれた歴史・文化のメッセージであり、昨日から今日、今日から明日へ向けての基礎資料となっております。

今回報告されるのは村山北割東工区から青木遺跡、箕輪西工区から海道前遺跡の2遺跡で、調査により検出された内容は、青木遺跡からは縄文時代後期の石棺墓群2群から構成される集配石造構の祭祀遺構、海道前遺跡からは平安時代の住居址3軒と遺構数は少ないものの当時の集落の一部と思われ、出土土器により当時の流通経路を考える上での参考となる甲斐型の土師器・須恵器・灰釉陶器がセットで発掘されています。

これら先人の生活の知恵・営みなどの遺跡に触れることにより、私たちの住む高根町の歴史の一端が記録保存というかたちではありますが、それについて記述されておりますので、御高覧いただき活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、この事業に御協力いただきました地元の方々をはじめ、山梨県峠北土地改良事務所・山梨県教育委員会学術文化財課・山梨県埋蔵文化財センター等の関係各位に深く感謝申し上げます。

平成10年3月31日

高根町教育委員会

教育長 坂 本 基 可

## 例　　言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡高根町地内の埋蔵文化財の発掘調査報告である。報告する遺跡は、下記のとおりである。
  1. 海道前遺跡　高根町 箕輪　昭和56年度調査　箕輪 西工区
  2. 青木遺跡　高根町村山北割　昭和56年度調査　村山北割東工区
2. 発掘調査は、高根町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査によって得られた出土遺物・記録図面及び写真等は、高根町教育委員会で保管している。
4. 発掘調査及び本書作成にあたり、次の諸先生方・諸機関よりご指導・助言・協力をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。(順不同・敬称略)  
新津 健、八巻与志夫、米田明訓、保坂康夫、山下孝司、櫛原功一、日向千恵、県学術文化財課、県埋蔵文化財センター、帝京大学山梨文化財研究所、山梨県駿北土地改良事務所
5. 発掘調査組織  
調査主体 …… 高根町教育委員会
6. 発掘調査・遺物整理参加者(順不同・敬称略)  
榎本 勝、雨宮 智、清水 潤、浅川 一郎、浅川 覧治、清水あづま、清水 茂子、  
清水 魅香、平井 仁志、浅川 英三、浅川 美代、浅川 光子、浅川 輝枝、浅川 洋子、  
浅川 満江、茅野 光子、中嶋ねのえ、細田みぎわ、高柳 静香、仲嶋まゆみ、川端下圭子、  
植松 梅子、白倉カツ子、原藤 栄、原藤まさみ、小池 澄子

## 凡　　例

1. 造構エレベーション・セクション図において、水平線横の数字は海拔高度(m)を示す。
2. 縮尺は、各挿図ごとに示してある。
3. 方位は、磁北を示している。

## 目 次

序 文

例 言

|                    |    |
|--------------------|----|
| 第一章 調査状況 .....     | 1  |
| i 調査に至る経緯と経過 ..... | 1  |
| ii 周辺の地形 .....     | 1  |
| iii 周辺の地質 .....    | 1  |
| iv 遺跡の立地 .....     | 2  |
| v 周辺の遺跡 .....      | 2  |
| vi 調査方法 .....      | 3  |
| 第二章 海道前遺跡 .....    | 9  |
| i 遺跡の環境 .....      | 9  |
| ii 検出された遺構 .....   | 10 |
| iii 出土した遺物 .....   | 13 |
| 第三章 青木遺跡 .....     | 17 |
| i 遺跡の環境 .....      | 17 |
| ii 検出された遺構 .....   | 19 |
| iii 出土した遺物 .....   | 36 |
| iv ま と め .....     | 73 |

# 第Ⅰ章 調査状況

## i 調査に至る経緯と経過

高根町では、水田の有効利用・高効率化等を図るために昭和53年度より国の補助を得ながら農地の区画整理事業＝基盤整備事業を積極的に実施している。このことにより、山梨県岐北土地改良事務所及び町振興課・産業観光課より埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあり、当教育委員会で確認調査を行った。確認された遺跡は、箕輪工区より海道前遺跡、村山北割工区より青木遺跡があることが判明し、記録保存を目的とした緊急発掘調査を当教育委員会が主体となり実施した。実施した遺跡の調査期間は、次のとおりである。

海道前遺跡 昭和56年7月1日～昭和56年7月31日

青木遺跡 昭和56年8月1日～昭和56年10月31日

## ii 周辺の地形

高根町は、山梨県の北西部に県境としてそびえている八ヶ岳の南麓に広がる高原の町である。この連山は、日本列島を東西に二分する大地溝帯上（フォッサマグナ）に噴出した火山性の山であり、噴出物の特性のため裾野は比較的なだらかな地形（台地状を呈する）であるが、町内東部は飯盛山火山群に属するため、この周辺はやや急峻である。

八ヶ岳からつづくこの台地は、国道141号線の韭崎から小諸へ抜ける途中の弘法坂付近で合流する大門川と川俣川によって2つに区分することができ、北側は標高約1,000m以上の亜高山帯に属し、南側は標高約600mから約900mの範囲で高根町の主要部を占め、基幹作物は水稻等を主としている。

町の東は、八ヶ岳の赤岳を水源とし南流する川俣川・大門川（須玉川）によって激しく浸食された比高差約100mを測る垂直に切り立った崖が20数km南北につづき、北は前述の南北に折り重なるように列になった八ヶ岳連峰によって隔離された地域となっている。唯一開けた西側も隣町である長坂町及び小淵沢町の西側を南流する富士川（釜無川）によって隔離されている。この両河川に挟まれた台地は、南北20数km、東西の最大幅10数kmを測り、台地上を流れる小河川は南流し、前述の両大河川に合流している。

## iii 周辺の地質

八ヶ岳は、本州を中央で二分する大地溝帯＝糸魚川静岡構造線上に噴火した火山群で、その生成時期は地質年代で第三紀末から第四紀の洪積世前期といわれ、形成している熔岩はいわゆる輝石安山岩類で標高1,000m以上に分布し、それ以下の広大な山麓の斜面は、熔岩の粉碎物や、噴火による堆積物からなる火山質腐植土の黒褐色をした表土が覆っている。

標準的な土層堆積状態は上から、黒色土＝耕作土（20～40cm）、黒色土層（30～60cm）、関東ローム層（3～4m）、木曾御岳山を起源とする細粒軽石層いわゆる鹿沼土（40～60cm）、白色系粘土層（10

～20cm)、暗赤褐色疊粘土層(八ヶ岳火碎泥流)となる。

#### iv 遺跡の立地

各工区内の遺跡について個々に説明していきたい。箕輪工区内には、海道前遺跡が所在した。海道前遺跡は、標高約650mを測る水田中の微高地上に所在し、この遺跡は台地上の西縁に存在していたが、水田造成時にごくわずかではあるが、削り取られ消滅した部分があった。

村山北割東工区内には、青木遺跡が所在した。この遺跡は、標高約720m前後を測る、北に延びる尾根上の台地から緩やかに東傾斜とテラス状に張り出した微高地上に立地している。

#### v 周辺の遺跡

八ヶ岳南麓の台地上(噴火による山体崩壊の流出を起源とする)には南流する小河川が数条あり、この小河川によって開拓され、肥沃化された大地は古くから開拓されて現在にいたっている。

昭和37年に作成された県下の埋蔵文化財分布調査台帳によれば、高根町内では42ヶ所の遺跡が記載され、昭和61年度に高根町教育委員会が行った埋蔵文化財分布調査では142ヶ所の遺跡が確認されている。この分布状況によれば、標高800m以下の中高地上は遺跡が非常に濃い状態で確認されている。ほ場整備事業が行われる田畠はこの台地上から一段下がった場所で低湿地帯であり、古くから耕作が行われ幾世代に亘って面積を増やしながら、徐々にではあるが水田を広げてきたものと思われ、ふだんの耕作では水田中の不透水層より下部には耕作が及ばないことから遺跡としては認知できない状況であり、事業に先立つ事前調査により確認されたものである。分布調査により確認されたこれらの遺跡の多くは、縄文時代中期・平安時代・中世を中心としているが、発掘調査が進むに従い旧石器時代、縄文時代前期・後期・弥生時代後期の遺物の散布のほかに中世・近世の陶磁器・石造物が出土し、新たな歴史の証言者となっている。

以下にこの周辺で発掘調査及び踏査によって確認された遺跡について若干の説明をしてみたい。

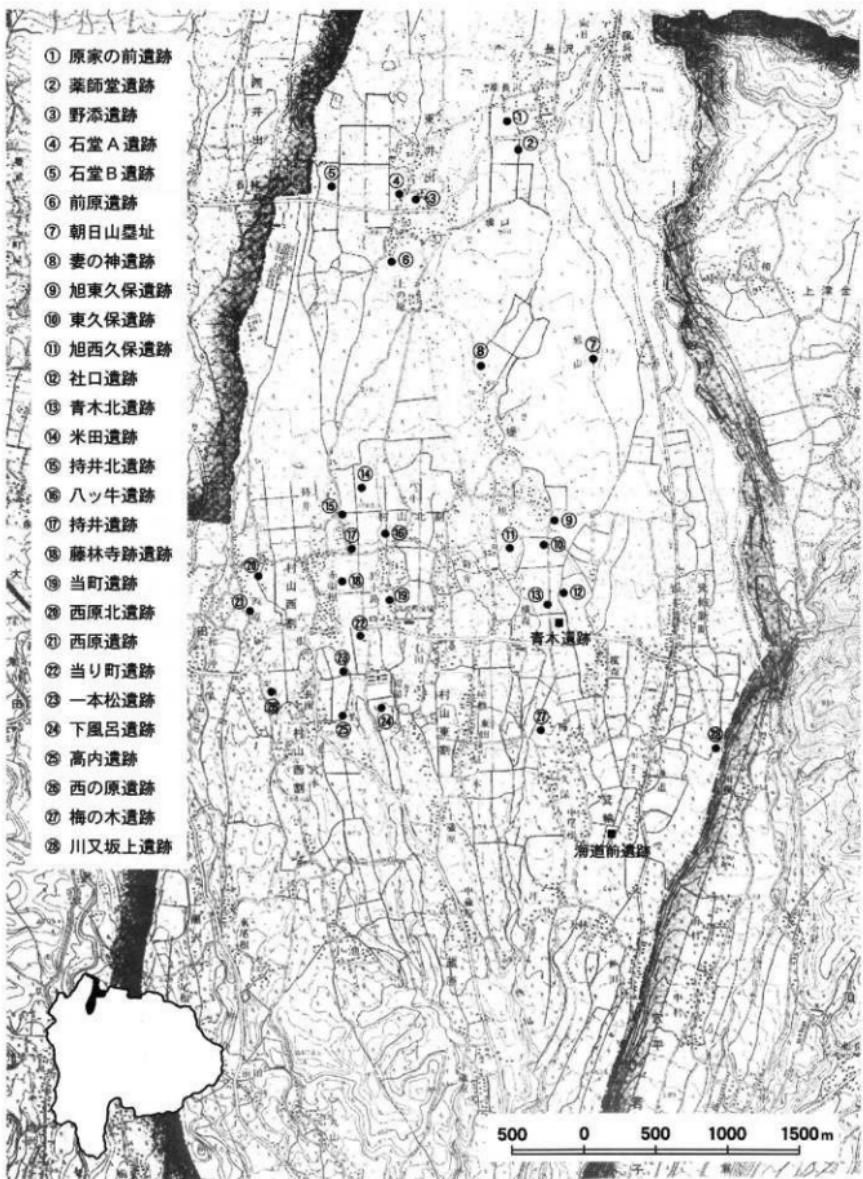
1は『原家の前遺跡』で、平成3年に県営は場整備事業に伴う発掘調査を行い縄文時代前期から中世・近世にかけての土坑群が検出されている。2は『業師堂遺跡』で、平成元・2年の2ヵ年にわたり調査を行ったが、遺構の状況から1つの遺跡であり、検出された遺構は縄文時代前期・中期・後期・晩期の土坑群と平安時代集落址がある。3は『野添遺跡』で、昭和60年に調査され、縄文時代中期の集落址が検出されている。4は『石堂A遺跡』で、昭和60年に調査が行われ、前述の野添遺跡の直近であることからその続きであることが予想されたが、耕作による影響により平安時代の住居址1軒が検出されたのみである。5は『石堂B遺跡』で、検出された遺構が特殊であるため、昭和60・61年の2ヵ年に亘り調査を行った。確認された遺構は、縄文時代後期を主とする複合遺跡である。6は『前原遺跡』で、平成6年に調査され、中世の地下式土壙が5基確認されている。7は『朝日山墓址』で、朝日山の山頂に武田氏によって烽火台が造られたとされ、その後天正10年(1582)徳川氏・北条氏によって築かれたとされる砦である。8は『妻の神遺跡』で、近世の土壙墓群が検出されている。9は『旭東久保遺跡』で、平安時代の遺物、中世の陶磁器と掘建柱建物址群が検出されている。10は『東

久保遺跡』で、昭和58年に県営は場整備事業に伴う発掘調査を行い平安時代の鐵冶遺構を伴う集落址が検出されている。11は『旭西久保遺跡』で、平安時代の集落址が存在する。12は『社口遺跡』で、縄文時代早期・中期・後期、平安時代の集落址が検出されており、それらの状況からこの付近一帯は比較的大規模な遺跡として周知されている。13は『青木北遺跡』で、昭和57年に県営は場整備事業に伴う発掘調査を行い平安時代の集落址が検出され、この中で最大規模の住居址中より礎石が検出されている。14は『米田遺跡』で、平成4・5年の2カ年に亘り調査を行ったが、遺構の状況から1つの遺跡であり、縄文時代前期の集落址と中世の土坑、近世の住居及び井戸が検出されている。15は『持井北遺跡』で、縄文時代前期の遺構・遺物が確認されている。16は『ハツ牛遺跡』で、平安時代と中世の溝が確認されている。17は『持井遺跡』で、縄文時代中期の住居址1軒、埋甕2基、土壙11基(中世の土壙墓1、時期不明10)、時期不明の溝1条が検出され、中世の葬送儀礼・墓の在り方を示す遺跡である。18は『藤林寺跡遺跡』で、縄文時代中期、平安時代、中世の五輪塔群及び墓壙が確認されており、中世の葬送儀礼・墓の在り方を示す遺跡である。19は『当町遺跡』で、近世の土壙墓4基が検出され、近世の葬送儀礼・墓の在り方を示す遺跡である。20は『西原北遺跡』で、平安時代の住居址が2軒・近世の土壙墓1基が検出されている。21は『西原遺跡』で、縄文時代中期・平安時代の住居址が検出されている。22は『当り町遺跡』で、弥生時代後期の住居址が1軒検出されている。23は『一本松遺跡』で、縄文時代前期から平安時代にかけて遺物が出土している。24は『下風呂遺跡』で、縄文時代中期から後期にかけての遺物が出土している。25は『高内遺跡』で、弥生時代後期と平安時代の集落址が検出されている。26は『西の原遺跡』で、古墳時代後期の住居址が検出されている。27は『梅ノ木遺跡』で、縄文時代中期の集落址が検出されている。28は『川又坂上遺跡』で、縄文時代中期・後期、平安時代の集落址が検出されている。

以上28遺跡について若干の説明を行ってきたが、そのほとんどの遺跡から縄文時代中期の遺構・遺物が検出されていることは、この地域一帯に一代文化圏が広がっていたことを示している。

## vi 調査方法

調査対象面積は、年度によって工事実施面積が異なるが平均的には約5ha実施しているため、全体的な工程の中で土の切り盛りがあり、切り土される場所を中心に試掘調査を行い遺構・遺物の確認を行った。重機によって表土を除去し、遺構の確認及び掘り下げは人力によって行った。調査地内に任意で10~20m四方のグリッドを設定し、その中を4等分してサブグリッドを設定して遺構の確認状況に合わせて調査を行った。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 調査遺跡位置図 (1/5,000)



第3図 調査遺跡位置図 (1/5,000)



図版1 遺跡位置（1）

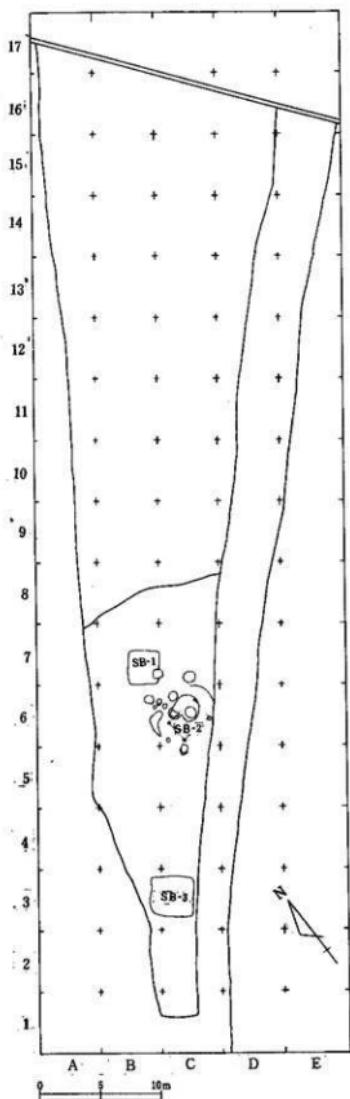


図版2 遺跡位置（2）

## 第Ⅱ章 海道前遺跡

### i 遺跡の環境

本遺跡は、山梨県北巨摩郡高根町箕輪字海道前1370番地外に所在し、標高約685mを測る。地形は、緩やかに南北に傾斜する尾根上で、西面する斜面上に位置する。



第1図 遺構分布図

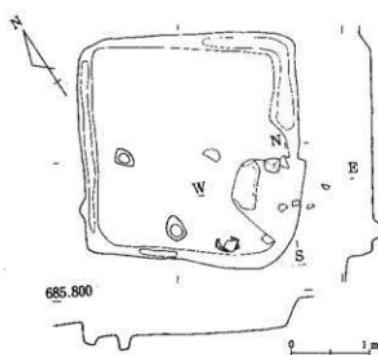
## ii 検出された遺構

検出された遺構は、平安時代の住居址3軒、土坑1基である。

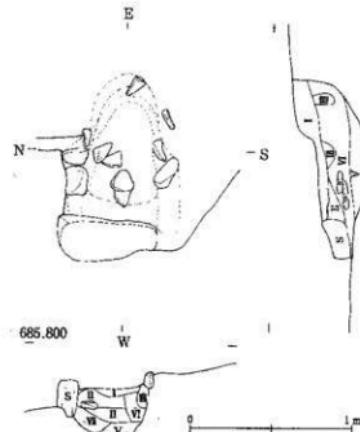
### (1) 積穴住居址

#### 1号住居址 (SB-1) 第2図

本遺構は中央部南寄りに位置 (グリッドB-7) する。形状は、長軸2m80cm・短軸2m70cm・壁高16~30cmを測る隅丸方形である。周溝は、西北・北東隅に1部確認された。ピット2本がある。カマドは東壁南寄りにあり、天井石、袖石4個が確認された。カマドの保存状態は良好であった。全長1m10cm・幅60cm・深さ30~50cmを測る。カマドの側より須恵器の四耳壺が出土した。平安時代の住居址である。



第2図 1号住居址 (1/60)



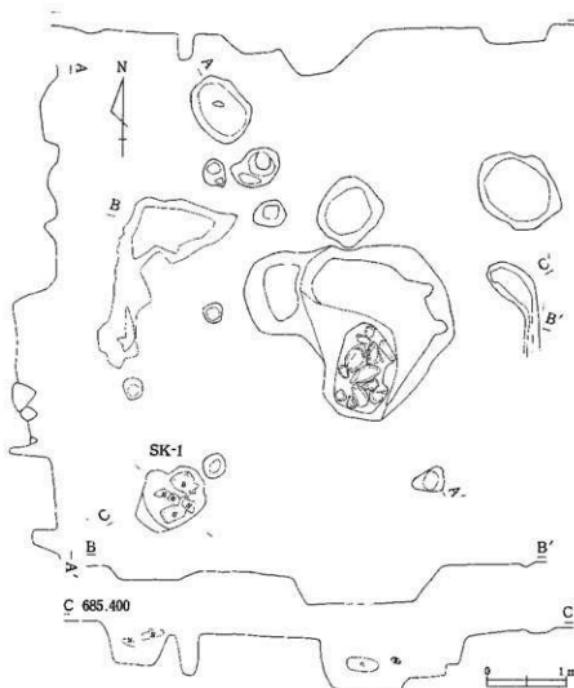
第3図 1号住居カマド址 (1/30)

#### 土層説明

- 1 暗褐色粘質土 (若干焼土粒及びカーボンを含む)
- 2 暗褐色粘質土 (若干焼土粒を含む、1層より暗い)
- 3 黄褐色粘土
- 4 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロックを含む)
- 5 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロックと黄褐色砂質土の混土)
- 6 暗褐色粘質土 (焼土粒及び若干カーボンを含む、2層より暗い)
- 7 暗褐色粘質土 (黄褐色砂質土混)

## 2号住居址 (SB-2) 第4図

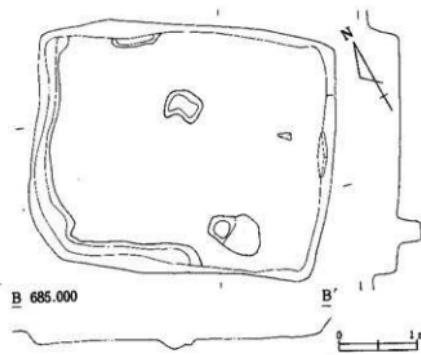
本造構は中央部南寄りに位置 (グリッドC-6) する。北東・北西の隅に周溝が残存するのみで、プランは確認できないが、形状は約5m前後の隅丸方形と推測される。主柱穴4本が検出された。カマドは確認できず、遺物も出土しなかった。平安時代の住居址と思われる。



第4図 2号住居址 (1/60)

### 3号住居址 (SB-2) 第5図

本遺構は南側に位置（グリッドB-3、C-3にまたがる）する。形状は、長軸3m70cm・短軸3m8cm・壁高30~40cmを測る隅丸方形である。周溝は南壁・西壁にあり、ピット2本がある。依存状態は良好であった。カマドは東壁にあるが、調査区域外内であるため調査できなかった。

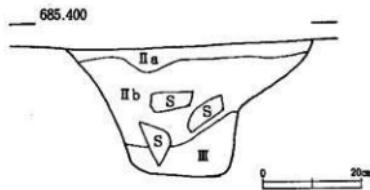


第5図 3号住居址 (1/60)

### (2) 土 坑

#### 1号土坑 (SK-1) 第6図

位置—グリッドC-6、2号住居址内にある。形状—楕円形、長径46cm・短径39cm・深さ27cmを測る。6個の石が覆土中より確認された。



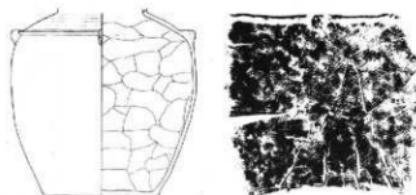
第6図 1号土坑 (1/10)

#### 土層説明

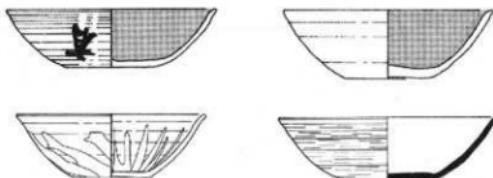
- II a 黒黄色粘土層
- II b 黒色粘土層（腐植土層）
- III ローム層（土質がボロボロしている）二次堆積

### iii 出土した遺物

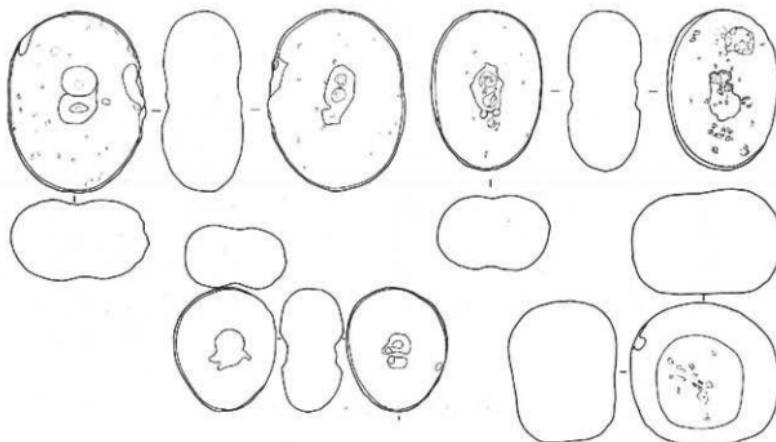
出土遺物は遺跡北側の沢の黒色土中より、流れ込みによる縄文時代中期の多数の土器片、石器（図9）が出土した。また、平安時代の住居址より土器（図7、8）が出土した。



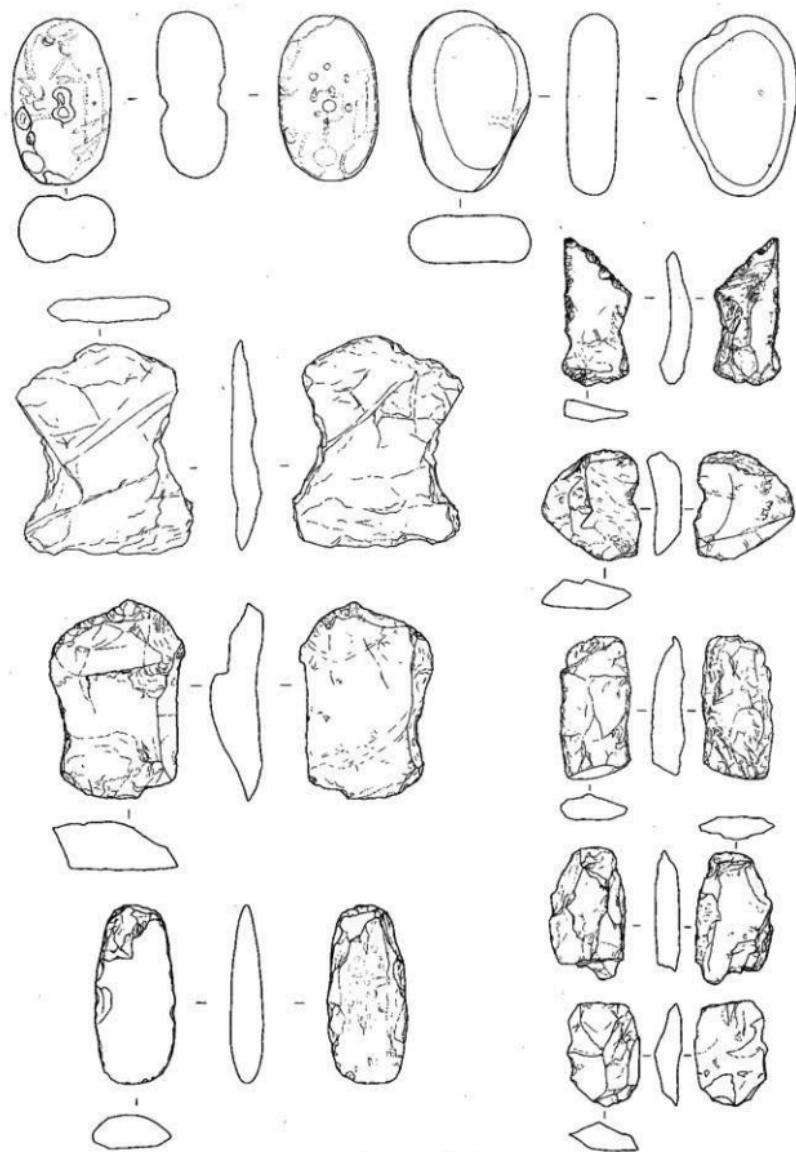
第7図 1号住居址出土土器実測図（1／6）



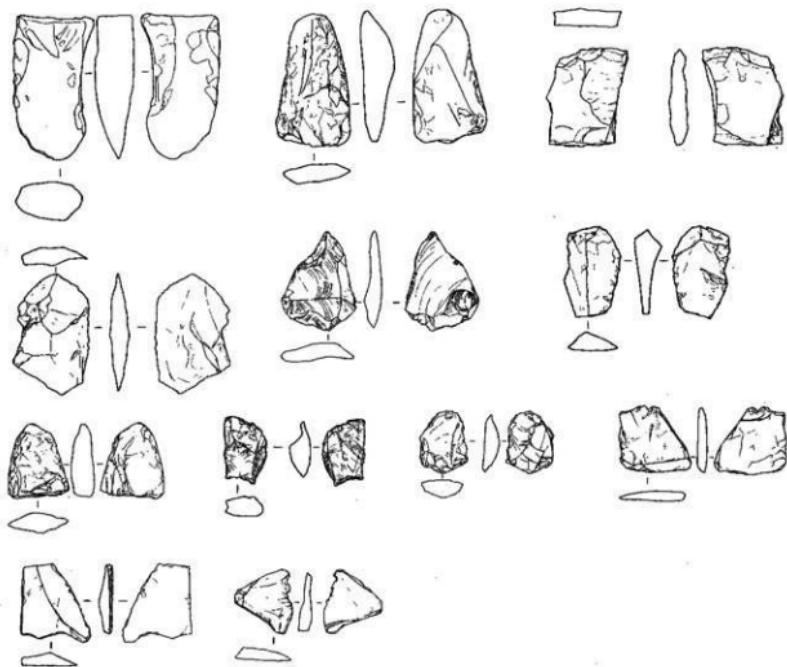
第8図 2号住居址出土土器実測図（1／3）



第9図 遺構外出土石器実測図（1／3）



第10図 出土石器実測図 (1 / 3)



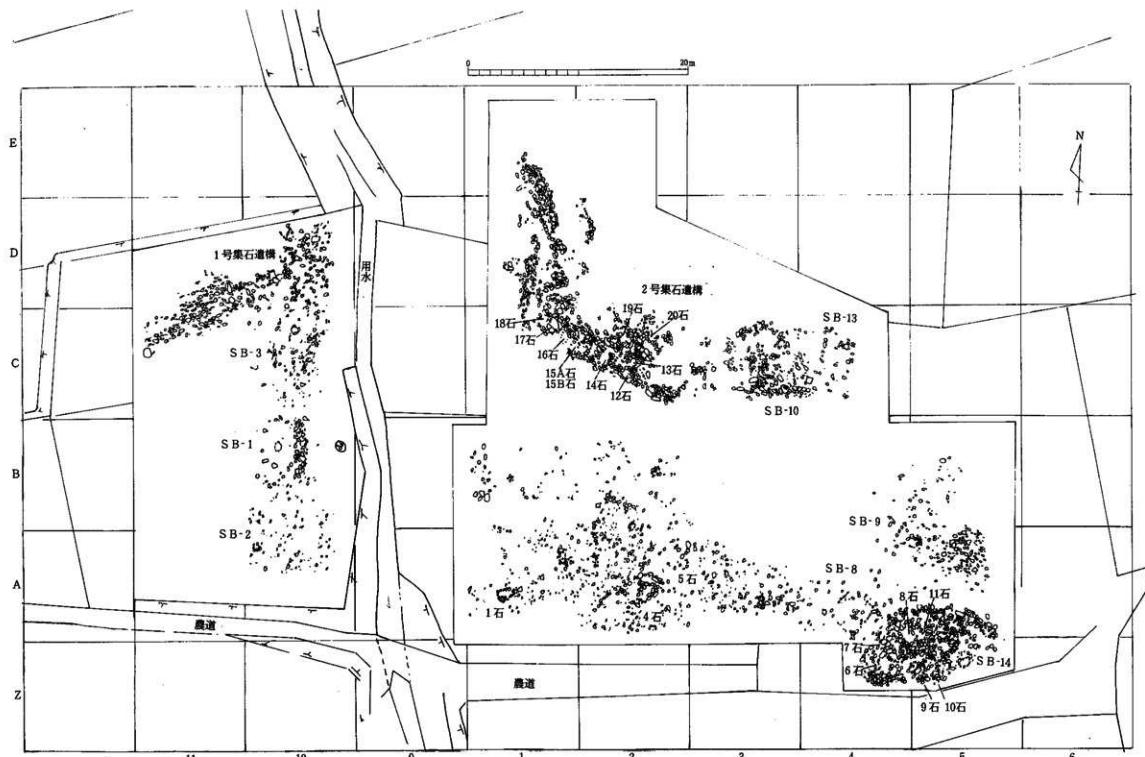
第11図 出土石器実測図 (1/3)



## 第Ⅱ章 青木遺跡

### i 遺跡の環境

本遺跡は、山梨県北巨摩郡高根町牛山北割字青木938番地外に所在し、標高約730mを測る。地形は、八ヶ岳南麓に発達した岩碎流堆積台地上の小尾根上に位置する。八ヶ岳南麓一帯には、縄文時代後・晩期の遺跡が比較的多く、長板上条遺跡、金生遺跡、石堂B遺跡等の著名な遺跡が存在する。



第1図 青木遺跡遺構分布図



第2図 青木遺跡遺構配置図

## ii 検出された遺構

検出された遺構は、住居址14軒、大型集石遺構3基、石棺20基、土坑1基である。

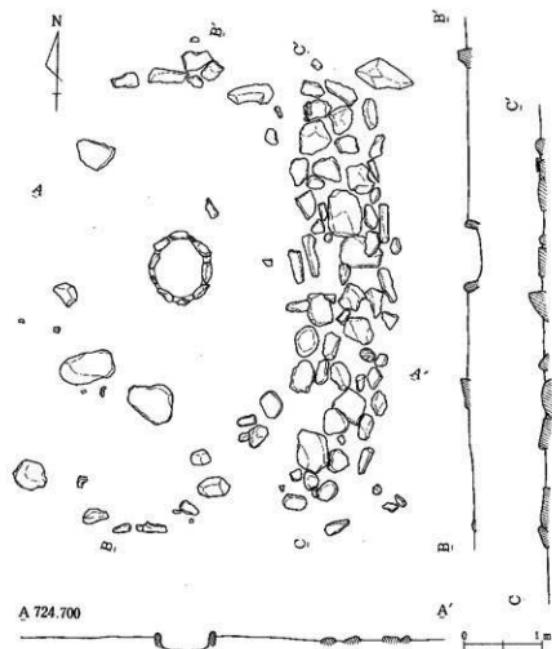
### (1) 壁穴住居址

15基の住居址のうち、石囲い炉の存在から9軒（1・2・3・4・8・9・10・13・13・14号）の住居址が確認され、縄文後期の集石を伴う住居址の形態である。他は（5・6・7・11・12号）住居址縁にある配石と見られる列石から住居址と推定したが、黒褐色土中の構築であること、集石下まで十分に調査が及ばなかったことなどから、住居址の規模・構造を明確にすることはできなかった。また、集石面まで掘り下げた時点で初めて住居址と確認されたため、住居址に帰属する遺物が明瞭でなく、住居址の時期を特定できなかったものもある。

以下、9軒についての説明である。

### 1号住居址（SB-1）第3図

本遺跡の西側（グリッドB-10）に位置する。形状は、長軸5m30cm・短軸4m20cmの長方形と推定される。東辺部に南北5m30cm・東西4m20cmの範囲に長方形の敷石があり、南・北辺部に列石が確認された。住居址のはば中央部に石囲い炉が検出された。形状は円形、直径80cmを測る。



第3図 1号住居坑実測図 (1/60)

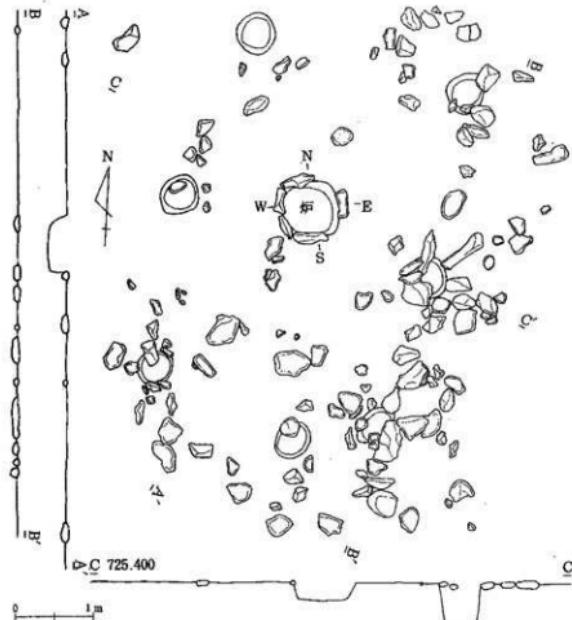
### 2号住居址（SB-2）

本遺跡の西側（グリッドA-10）に位置する。石囲い炉が検出されたため住居址と確認した。住居址の規模は調査できなかった。石囲い炉の形状は椭円形で、全長95cm・幅85cmを測る。

### 3号住居址 (SB-3)

第4図

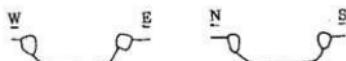
本遺跡の西側(グリッドC-10)に位置する。形状は、長軸約6m・短軸4mの長方形と推定される。6本の柱穴が確認され、形状は円形で、直徑50cm・深さ50cmを測る。南北2間(4m80cm)・東西1間(3m16cm)を測る。石囲いの炉は住居址中央部に位置し、形状は円形で、長径90cm・短径80cm・深さ22cmを測る。



第4図 3号住居址実測図 (1/60)

### 4号住居址 (SB-4) 第6図

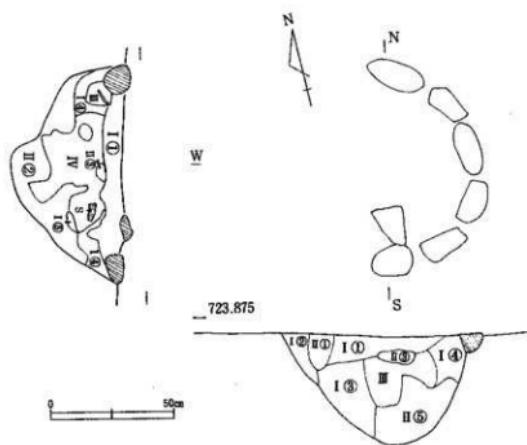
本遺跡の西側(グリッドB-2)に位置する。縁辺部に相当すると思われる配石から、形状は長方形で、長軸6m・短軸4m50cmと推定される。北・西辺部に一部に良好な列石が残るのみである。石囲いの炉は中央やや東寄りに位置する。形状は円形で、長径90cm・短径80cm・深さ44cmを測る。西半分の炉石は遺存しない。



第5図 3号住居址炉実測図 (1/40)



第6図 4号住居址実測図 (1/60)



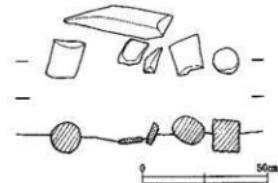
第7図 4号住居址実測図 (1/20)

#### 土層説明

- I 褐色土層
  - ① 若干の焼土粒を含んだ明るい褐色土層
  - ② ①③の中間色、ややしまりあり
  - ③ 褐土のベースに焼土粒及びしまりのある明褐色土を含む
  - ④ 若干のしまりのある褐色土をベースに焼土が混入した土層
  - ⑤ 褐色をベースに若干の焼土混入
- II 暗褐色土層
  - ① しまりのない上層でかなり黒い
  - ② 若干のしめり気があり、焼土粒がとんでいる
  - ③ 褐土をベースに灰・焼土を混入
- III 焼土

#### 5号住居址 (SB-5)

本遺跡の東側、3号集石内の（グリッドA-5）に位置する。集石造構の最下部から炉のみ検出され、住居址と確認された。住居址の規模・構造は調査できなかった。住居址内（グリッドA-2）に石棒3本を使った祭祀的造構が検出された。



第8図 石棒を使用した配石造構  
(1/20)

#### 6号住居址 (SB-6)

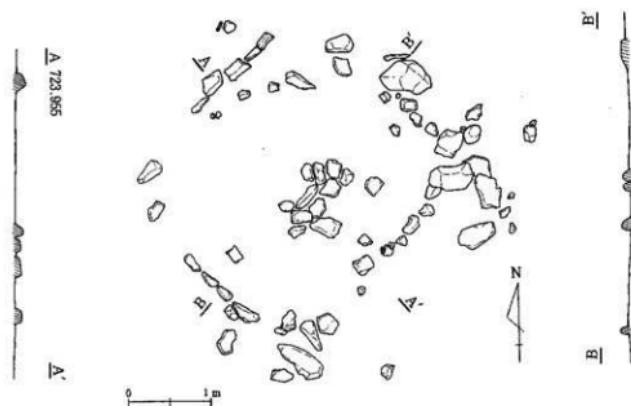
本遺跡の東側、3号集石内の（グリッドA-5）に位置する。5号住居址と同様である。

#### 7号住居址 (SB-5)

本遺跡の東側、3号集石内の（グリッドA-5）に位置する。5号住居址と同様である。

#### 8号住居址 (SB-8) 第9図

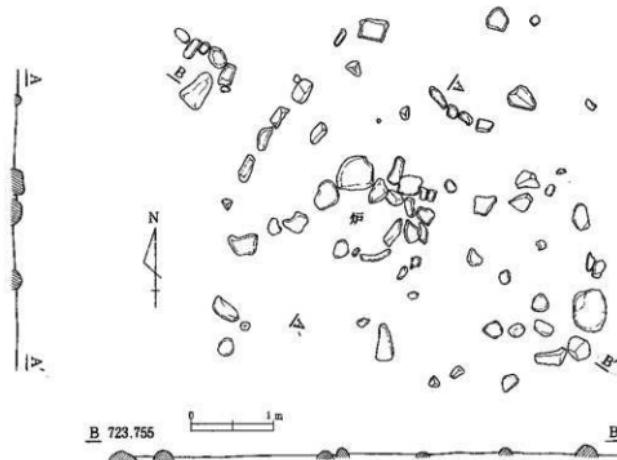
本遺跡の東側（グリッドA-4）に位置する。3m20cm・3m50cmの方形に配置された列石から、形状は方形プランと推定される。石囲い炉はほぼ中央部位置し、形状は円形で、直径70cmを測る。炉石と敷石部分が遺存する。



第9図 8号住居址実測図 (1/60)

#### 9号住居址 (SB-9) 第10図

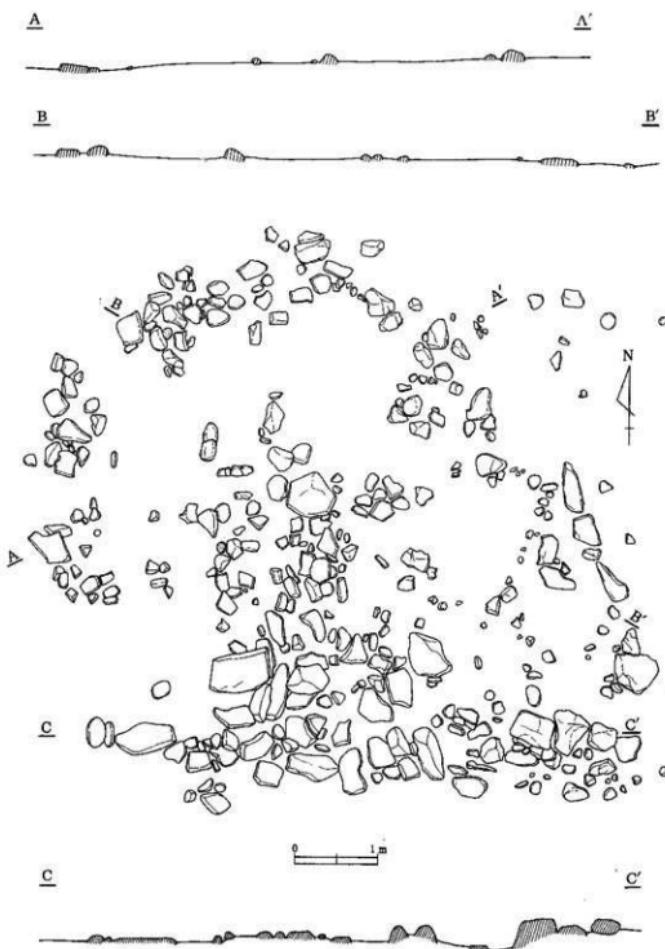
本遺跡の東側 (グリッドB-4) に位置する。北西辺部・北東辺部の列石から、3m80cm・4mの方形に配置された列石から、形状は方形プランと推定される。石圓い炉はほぼ中央部位置し、形状は円形で、直径1mを測る。敷石部分が遺存する。8号住居址とはほぼ同様な形態・規模である。



第10図 9号住居址実測図 (1/60)

10号住居址 (SB-10) 第11図

本遺跡はグリッドC-3に位置する。4m・5mの方形に配置された列石から、形状は長方形プランと推定される。石囲い炉はほぼ中央部位置し、形状は方形で、一辺65cmを測る。出入口部と考えられる南辺部中央から南方へ伸びた逆T字型の敷石部分があり、敷石南端から南辺部配石まで約6m50cmを測る。本址は堀之内～加曾利B期に特徴的な住居形態を呈している。



第11図 10号住居址実測図 (1/60)

### 11号住居址（SB-11）

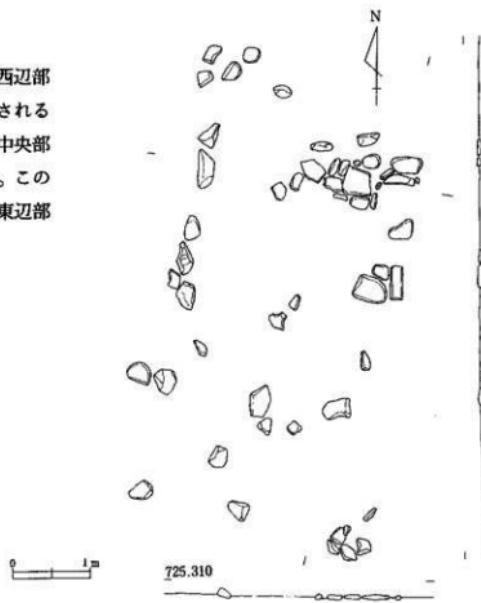
本遺跡の中央部の2号集石内（グリッドC-2）に位置する。10号住居址と同様に、集石の最下部で炉のみ検出され、住居址と確認された。住居址の規模・構造は調査できなかった。

### 12号住居址（SB-12）

本遺跡の中央部の2号集石内（グリッドC-2）に位置する。集石の最下部で炉のみ検出され、住居址と確認された。住居址の規模・構造は調査できなかった。5号住居址と同じである。

### 13号住居址（SB-12）第12図

本遺跡はグリッドC-3に位置する。西辺部に相当する列石あり、形状は方形と推定されるが、規模は不明である。石囲い炉はほぼ中央部位置し、形状は円形で、直径50cmを測る。この石囲い炉に付随して敷石が検出された。東辺部は調査区外であった。



第12図 13号住居址実測図 (1/60)

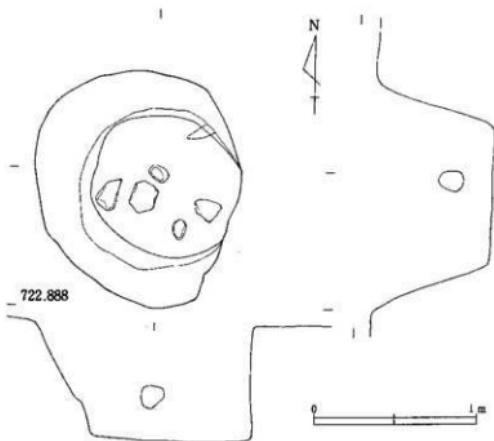
### 14号住居址（SB-12）

本遺跡はグリッドZ-5に位置する。3号集石に接して遺存した。住居址の形状、規模は不明である。石囲い炉はほぼ中央部位置し、形状は楕円形で、長径1m・短径85cmを測る南辺部は調査区外であったので、規模は不明である。西辺部に1号住居址と類似した敷石があり、その中央部には大形の平石と逆ハの字型の配石がある。

## (2) 土 坑

### 1号土坑 (SK-1) 第13図

位置—グリッドB-10。形状—楕円形・長径1m52cm・短径1m26cm・深さ71cmを測る。5個の石が復土中より確認された。



第13図 1号土坑実測図 (1/30)

## (3) 集 石 遺 構

調査区域内には小規模の配石、列石が数多く見られる、大きなまとまりを呈していた1～3号集石について説明する。

### 1号集石

幅約2～4m、長さ20mの列石状の配石である。集石の中に2・3号集石のように石棺群は検出されなかった。集石下部の調査が実施されなかったため、石棺または土壤の存在の可能性も考えられる。外観的には2号集石と類似し、土偶・丸石等の遺物が疊中に散在している。

### 2号集石

「く」の字形に折れ曲がった列石状の集石で、配石を持たない北側部分と配石群をもつ南側部分に分けることができる。北側部分は、幅約2～4m・長さ14m50cmの2～3条からなる列石状の集石である。主軸方向はN-18°-Wを示す。南側部分に5m・9mの範囲内に9基の石棺群が存在し、そのうち6基(13～18号石棺)はほぼ同じ主軸方向に従って横方向に配列し、配列歩行はN-64°-Wを示す。2号集石南辺の配列方向と一致し、列石状の配石は横方向に並んだ石棺群を基盤に形成されたことが分かる。つまり石棺と集石は、同一の意志に基づく構築と考えられる。

### 3号集石

列石状というより塊状の集石である。幅約8m・長さ約12mの範囲内に6基の石棺状遺構が検出された。そのうち4基（6～8・11号石棺）はほぼ同じ主軸方向に従って横方向に配列しており、その配列方向はN-50°-Eと示す。他の2基（9・10号石棺）は4基とはやや離れて配置されている。そのため3号集石は列石状の集石とはならなかった。集石中には石棺と関連が深いと思われる立石のほか、石棒・丸石等の遺物が散在し、石棺構築後の祭祀行為を窺うことができる。

#### (4) 石 棺

石棺は20基検出された。そのうち明確に確認できる石棺が17基ある。この中で15A、15B号石棺は2基の石棺がわずかに主軸方向を異にして、ほぼ同方向に接続したかのような形態をとっているため、同一石棺を2基分に使い分けているものと理解する。集落内の石棺の在り方は、①集石中に群をなして存在する12～20号石棺（2号集石内）、6～11号石棺（3号集石内）、②集石を伴わない単独存在する1号石棺、③集石を伴わないので複数存在する4・5号石棺がある。その中で①が集落の外側近くに位置するのに対し、②、③は中央付近に位置するという違いがある。ただし、いずれも住居址に近接して位置するという点で共通する。

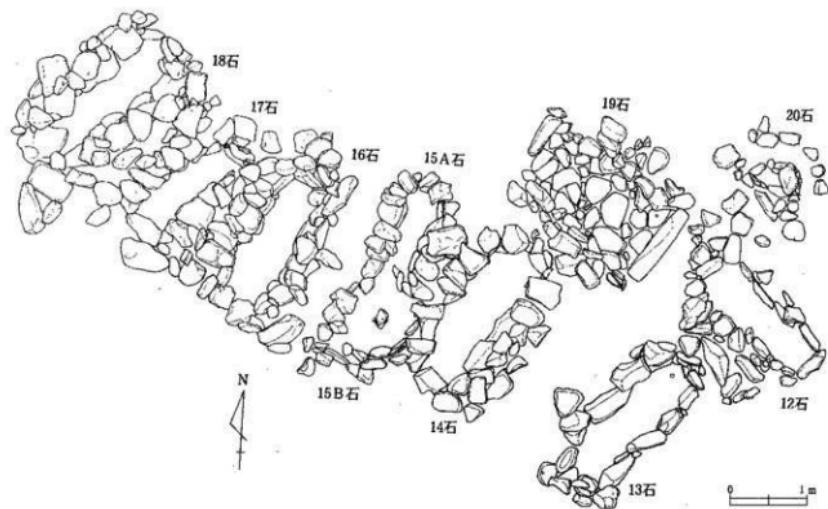
石棺の構造はいずれも石棺上部を地上に露呈させ、下部を地中に埋設したもので、およそ3形態に分類できる。

①略長方形プランの石棺で、平坦面をもつや大形の礫を横方法に1段立てて並べ、その上部にやや小型の礫を2～3段小口積みに積む。更に上部には3～4枚の大形の平板状の巨礫で蓋をするのが本来の形であるが、半数以上は蓋石が欠如し、しかも完全に蓋石で覆われていたのは18号石棺の一例のみであった。規模は内法で長軸1m20cm～1m80cm、短軸約30cm～90cm、深さ40cm～60cmを測る。1・4～18号石棺に該当する。

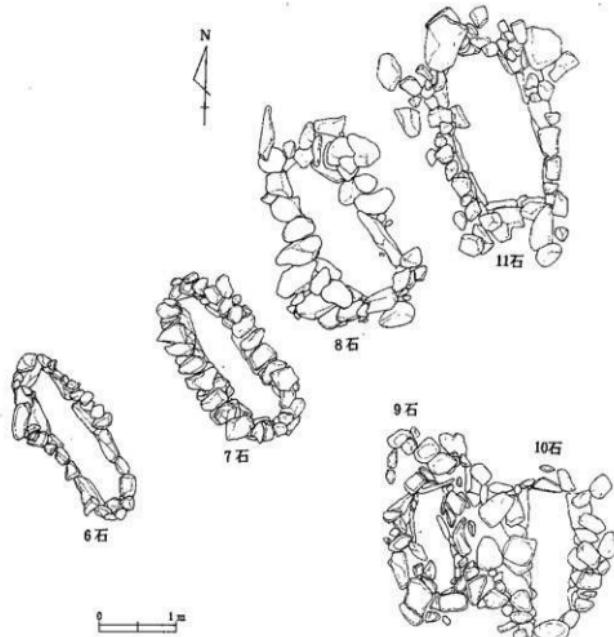
②両端部に大形の平板状の礫を横に立て、底面（床面）に敷石を設け、両側面にやや小形の礫を数段積んだもので、蓋石は存在しない。19号石棺1基のみである。

③30cmほどの平板状の礫を立てて組んだ超小形の石棺で、1段目の直上に蓋石を載せた。20号石棺1基のみである。

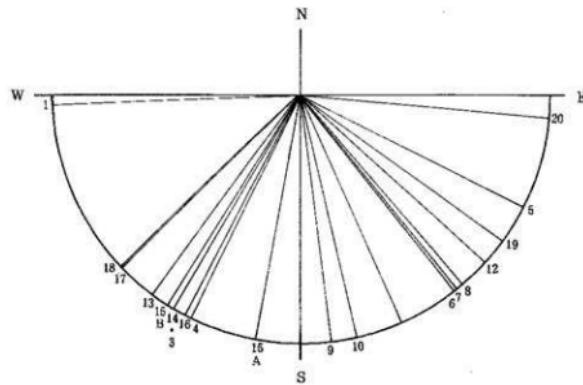
石棺の主軸方向は第16図に示す通りである。①はほぼ東西軸を示す1・20号石棺。②は西南軸を示す3・4・13～18号石棺。③はほぼ東南軸を示す5～12・19号石棺がある。この中で2号集石内では②が優勢で、3号集石内では③のみである。とりわけ2号石棺内で並列する13～18号石棺と、3号集石内で並列する6～8・11号石棺は集落の北西部と南頭部に集中しながら、90°の主軸方向の違いをみせて対峙している。また2号集石内の12・19・20号石棺は13～18号石棺とほぼ直交しており、いわば3号集石内と同じ指向性を持っている。



第14図 2号集石内石棺群 (1/60)



第15図 3号集石内石棺群 (1/60)

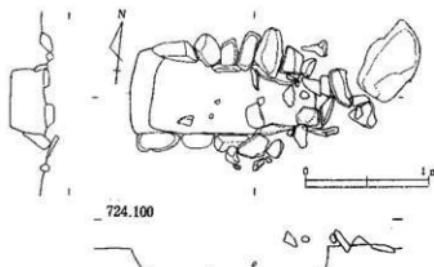


第16図 石棺の主軸方向横式図

**1号石棺 第17図**

位置—グリッド A-1。形状—長軸 1m30cm・短軸45cmを測る。(長さは内法とする。以下同じ)

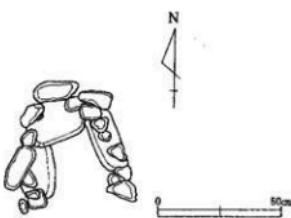
主軸方向—S-88°-W。蓋石は無い、西端部欠失。



第17図 1号石棺実測図 (1/40)

**3号石棺 第18図**

位置—グリッド D-10。形状—長軸不明・短軸30cmを測る。主軸方向—S-30-W。



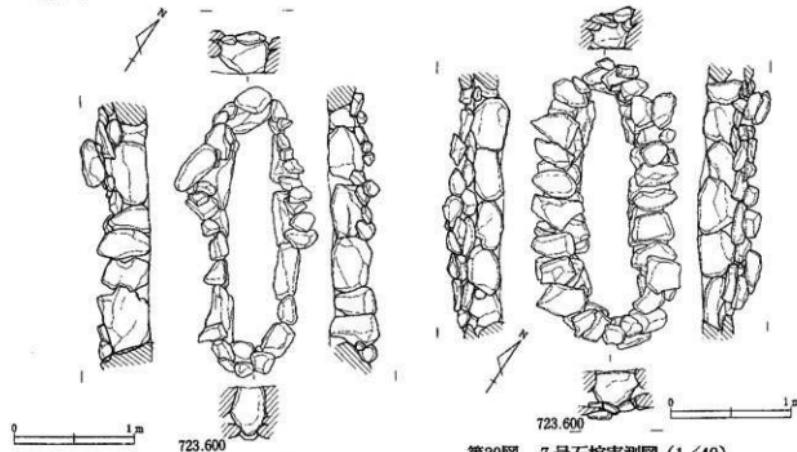
第18図 3号石棺 (1/20)

6号石棺 第19図

位置—グリッド Z-4。形状—長軸 1 m 70cm・短軸35cmを測る。主軸方向—S -38° - E。蓋石は無い。

7号石棺 第20図

位置—グリッド Z-4。形状—長軸 1 m 80cm・短軸35cmを測る。主軸方向—S -38° - W。蓋石は一部有り。

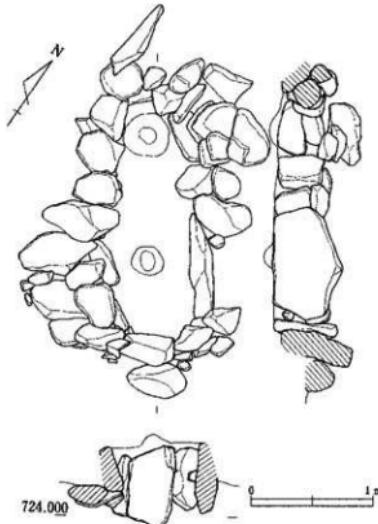


第20図 7号石棺実測図 (1/40)

第19図 6号石棺実測図 (1/40)

8号石棺 第21図

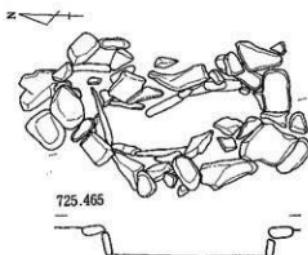
位置—グリッド A-4。形状—長軸 1 m 80cm・短軸50cmを測る。主軸方向—S -40° - E。蓋石は一部有り。底面にピット 2基有り。



第21図 8号石棺実測図 (1/40)

### 9号石棺 第22図

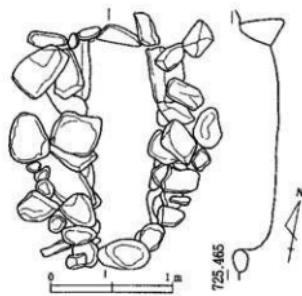
位置—グリッドZ-5。形状—長軸1m25cm・短軸30cmを測る。主軸方向—S-7°-W。蓋石は一部有り。



第22図 9号石棺実測図 (1/40)

### 10号石棺 第23図

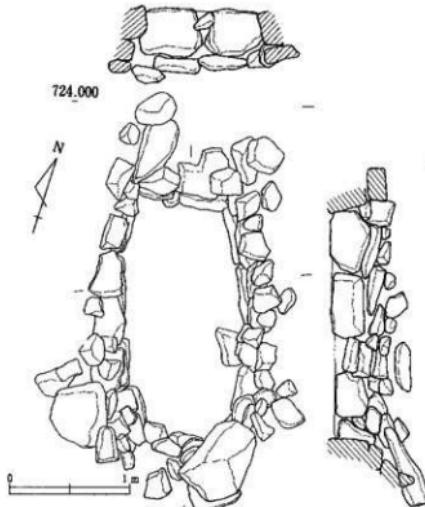
位置—グリッドZ-5。形状—長軸1m60cm・短軸50cmを測る。主軸方向—S-13°-E。蓋石は2/3有り。



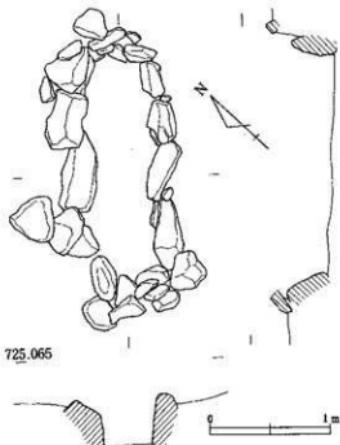
第23図 10号石棺実測図 (1/40)

### 11号石棺 第24図

位置—グリッドA-5。形状—長軸1m85cm・短軸90cmを測る。主軸方向—S-24°-E。蓋石は一部有り。



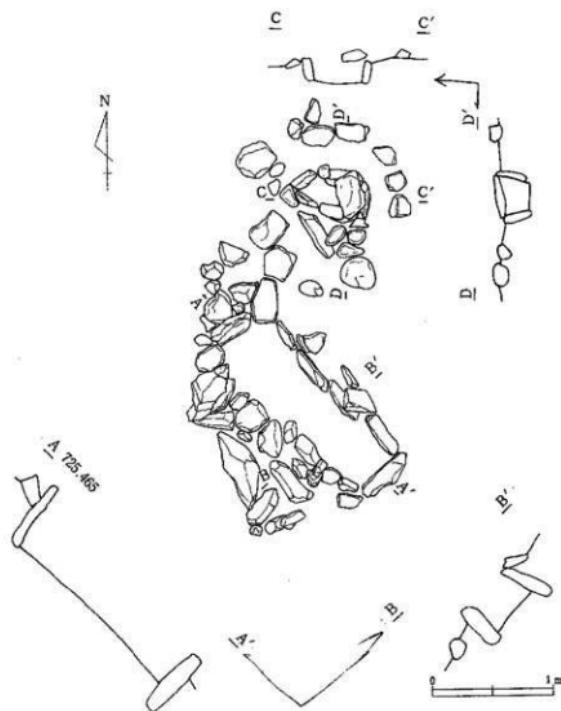
第24図 11号石棺実測図 (1/40)



第25図 12号石棺実測図 (1/40)

13号石棺 第26図

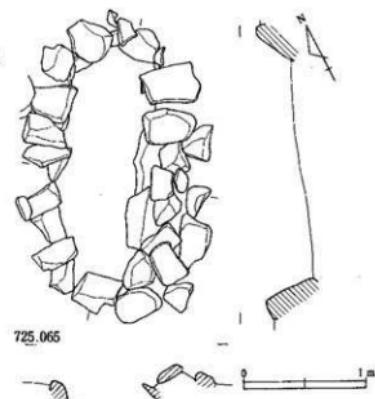
位置—グリッド C-2。形状—長軸 1 m 55cm・短軸45cm を測る。主軸方向—S-37°—W。蓋石は無い。



第26図 13号石棺実測図 (1/40)

14号石棺 第27図

位置—グリッド C-2。形状—長軸 1 m 80cm・短軸50cm を測る。主軸方向—S-30°—E。蓋石は無い。



第27図 14号石棺実測図 (1/40)

15A号石棺 第28図

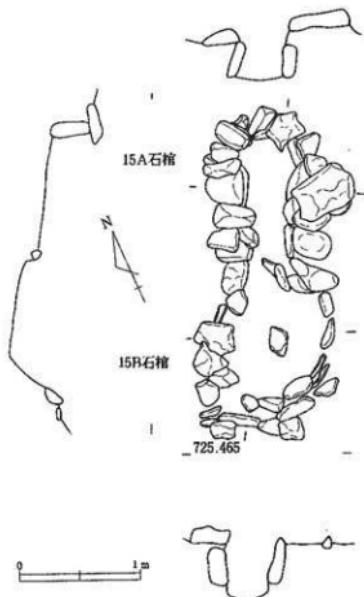
位置—グリッドC-2。形状—長軸1m5cm・短軸20cmを測る。主軸方向—S-10°-W。蓋石は1/2有り。

15B号石棺 第28図

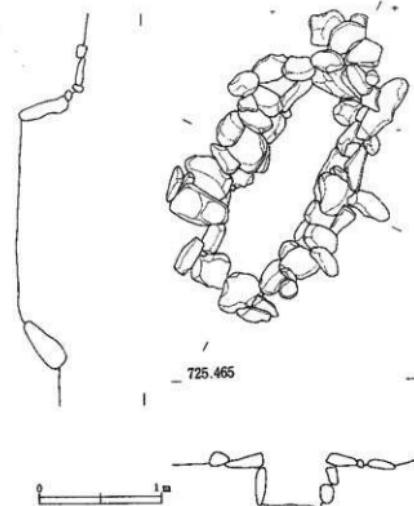
位置—グリッドC-2。形状—長軸90cm・短軸65cmを測る。主軸方向—S-32°-W。蓋石は無し。

16号石棺 第29図

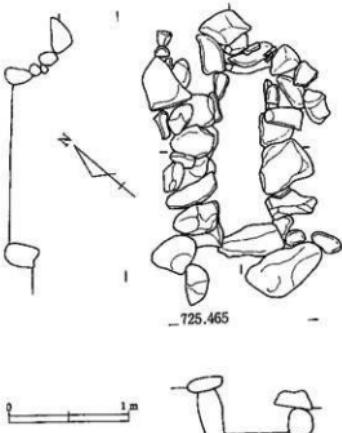
位置—グリッドC-2。形状—長軸1m60cm・短軸45cmを測る。主軸方向—S-27°-W。蓋石は無し。



第28図 15号A・B石棺実測図 (1/40)



第29図 16号石棺実測図 (1/40)



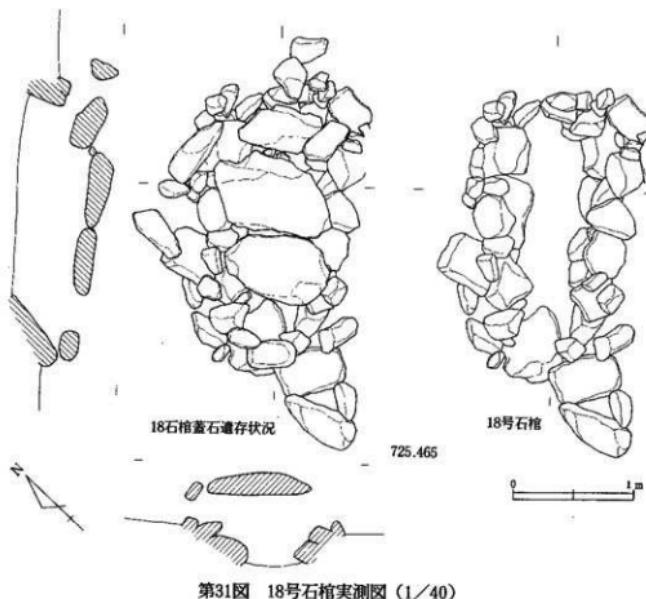
第30図 17号石棺実測図 (1/40)

17号石棺 第30図

位置—グリッドC-2。形状—長軸1m25cm・短軸35cmを測る。主軸方向—S-46°-W。蓋石は無し。

18号石棺 第31図

位置—グリッドC-2。形状—長軸1m55cm・短軸40cmを測る。主軸方向—S-46°-W。蓋石は完全有り。



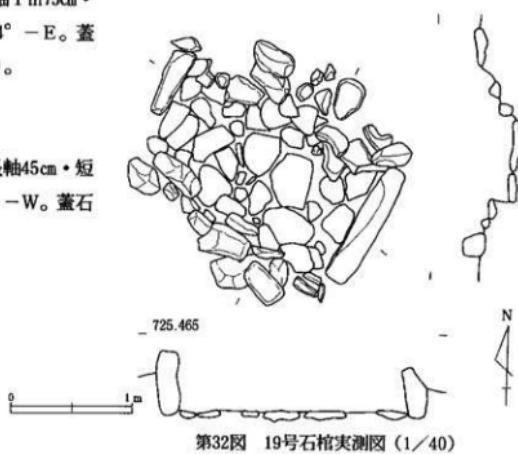
第31図 18号石棺実測図 (1/40)

19号石棺 第32図

位置—グリッドC-2。形状—長軸1m75cm・短軸65cmを測る。主軸方向—S-54°-E。蓋石は無し両端に平石、底に敷石有り。

20号石棺

位置—グリッドC-2。形状—長軸45cm・短軸20cmを測る。主軸方向—S-85°-W。蓋石は一部有り。超小形である。

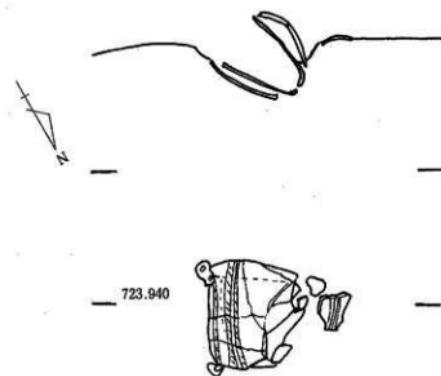


第32図 19号石棺実測図 (1/40)

(5) 埋壺遺構

1号埋壺 第33図

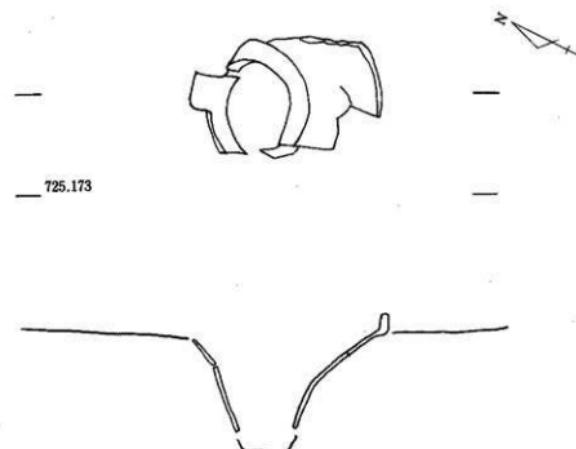
位置—グリッドA-1。直径17cm・深さ16cmを測る。二つの土器が入れ込みになっていた。



第33図 1号埋壺実測図 (1/10)

2号埋壺 第34図

位置—グリッドB-5。直径42cm・深さ26cmを測る。黒色土におおわれていたので、堀込みが不明であった。



第34図 2号埋壺実測図 (1/10)

### iii 出土した遺物

出土した土器は、多くは加曾利B～安行式土器分類され、堀之内式土器のうち代表的なものをあげた。

石棺内出土遺物は、19号石棺内から同形態と見られる石錘2点（第47図）が出土した。土器の小破片を除き出土しなかった。ただし、石棺付近の配石中に遺物が散在していた。11号石棺から石棺端部脇に墓標的な立石が出土した。このように個々の石棺の時期を判断する遺物は出土しなかったが、集石中の土器片が主に加曾利B1式以降のものであること、本遺跡の時期・他遺跡の類例などから加曾利B期と推測される。なお、骨片などは遺存しなかった。

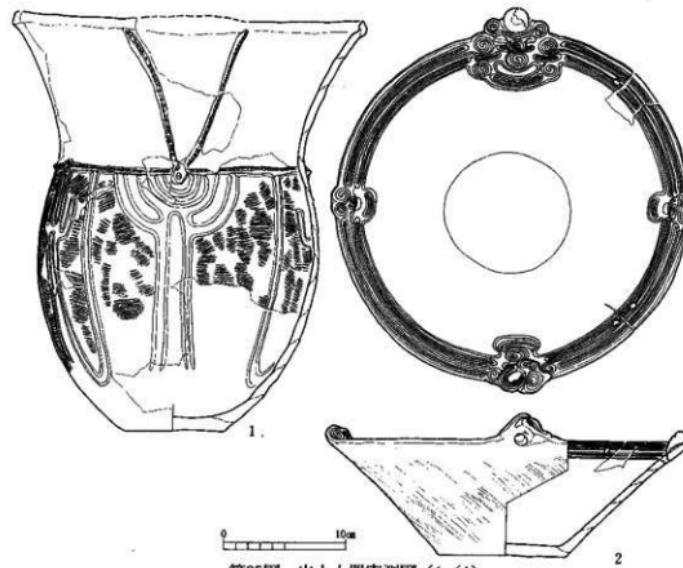
住居址、集石遺構、遺構外から341点の石器が出土した。

#### (1) 土 器

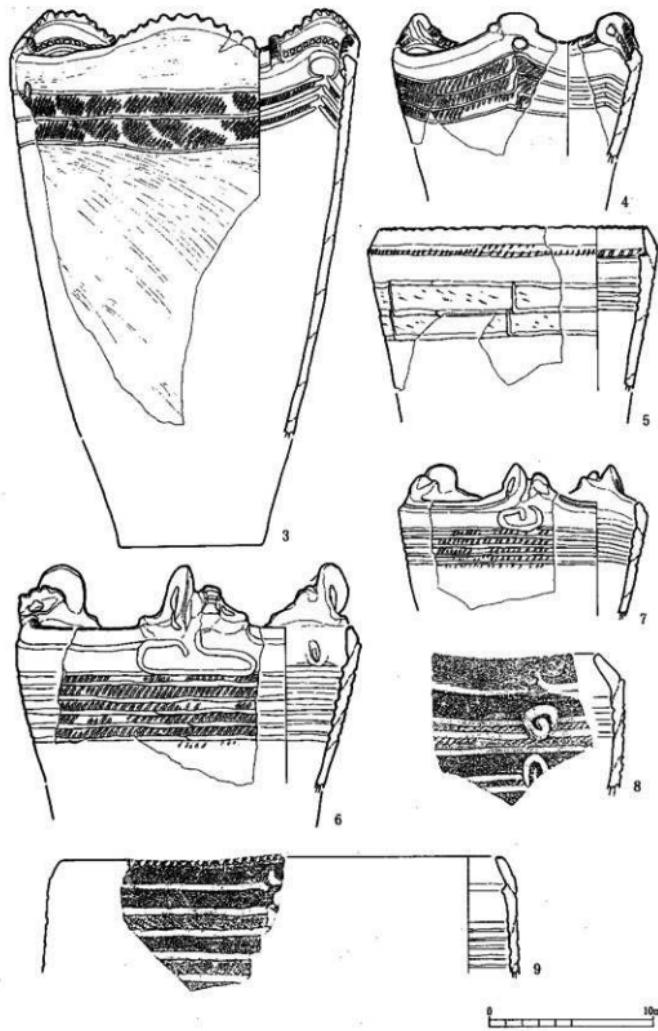
第1群土器（堀之内式土器）(1・2) 1 口径推定28.5cm、底径8cm、器高33.5cmの堀之内2式深鉢形土器。沈線→繩文L。B1グリッド出土（以下グリッド番号のみ）。2 口径29cm、底径10.2cm、器高12.3cmの堀之内2式浅鉢形土器。4単位の突起のうちのひとつは正面観を意識したもので、円球状突起と人面状の沈線文を施す。それぞれの突起部には円孔をもつ、沈線→細かい連続刻み目。補修孔が2箇所にある。ほぼ完形で重量は1021g。千葉県中沢貝塚に殆ど同じ類例がある。A2。

#### 第2群土器（加曾利B式土器）(3～55)

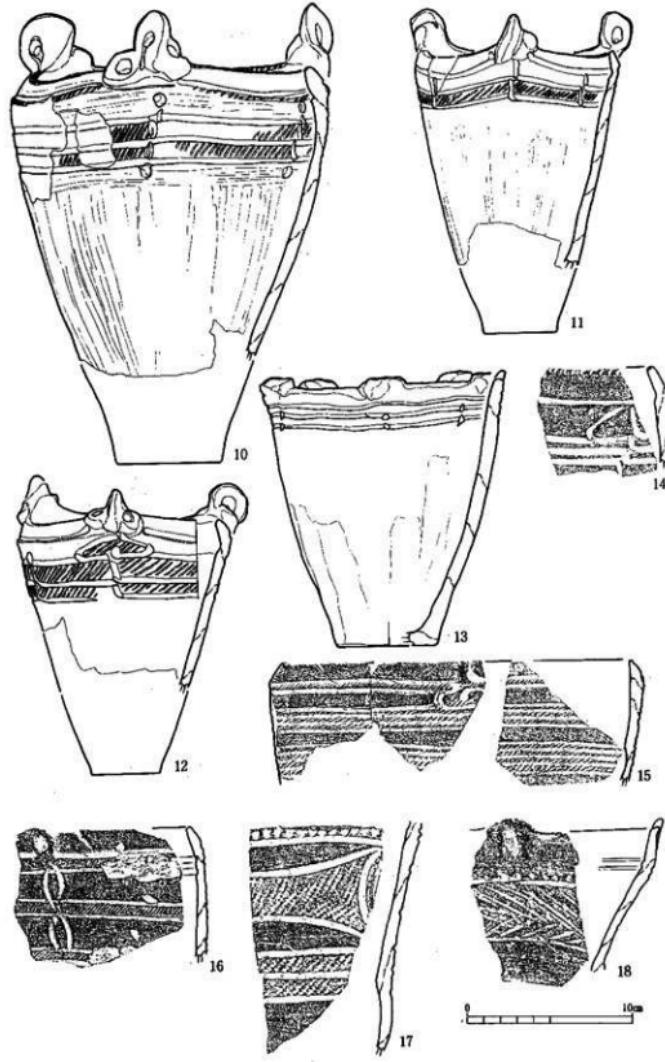
深鉢A型（いわゆる精製深鉢）第1類（内面に3状以上の沈線文と連続刺突文をもち、耳状突起、起点文様の発達なく、胴部には横帶文を施す）(3～5)



第35図 出土土器実測図 (1/4)

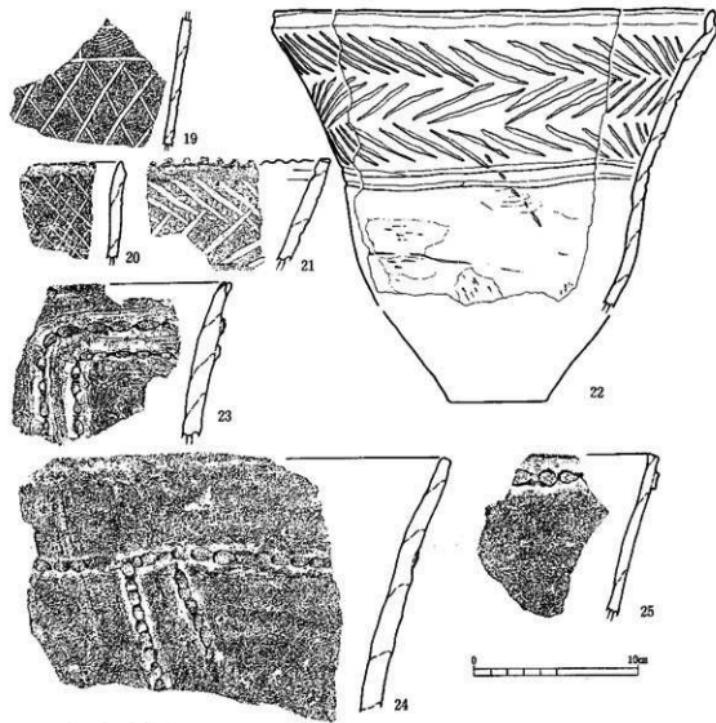


第36図 出土土器実測図 (1/3)

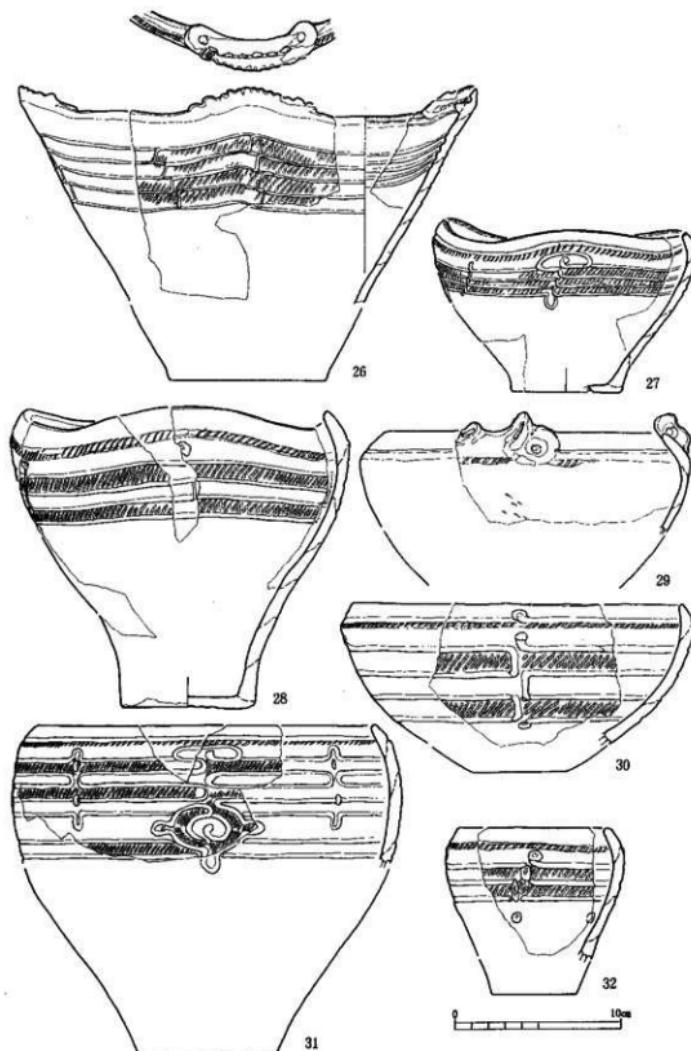


第37図 出土土器実測図 (1/3)

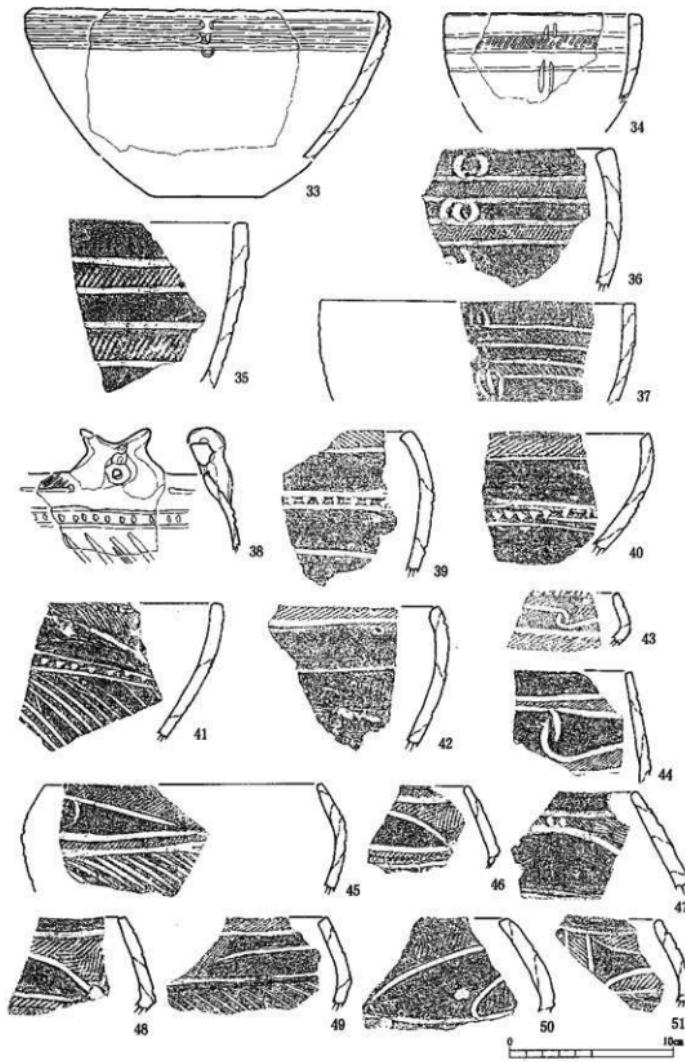
- a種（3単位の波状口縁、もしくは小突起を口縁にもつ）（3・4）3 沈線→縄文L R。A 1。
- 4 波状口縁頂部に小突起をもつ。沈線→縄文L R。A 2。
- b種（平縁）（5）5 口縁部、肩部に連続刻み目。胴部外面はヘラ削り→沈線→沈文上下をヘラ磨き。沈線間は擦痕が顕著である。A 2。
- 深鉢A型第2類（内面に3条以上の沈線文をもち、耳状突起、起点文様が発達し、胴部には横帯文を施す）（6～9）
- a種（3単位の、沈線で加飾された耳状突起をもつ）（6～8）6 内面突起下に円形押圧。沈線→縄文L R。A 2。7 沈線→縄文L R。A 2。8 b種かもしない。沈線→縄文L R。A 2。
- b種（平縁）（9）9 a種の可能性もある。沈線→縄文L R。A 1。
- 深鉢A型第3類（内面に数条の沈線文をもたず、胴部には横帯文を施す）（10～15）
- a種（口縁部には3単位の耳状突起、内面に1段の段差をもつ）（10～12）10 口径17cm、残存高さ22.5cm。口唇部と肩部に連続刻み目をもつ。沈線→縄文L R。A 2。12 口径11.8cm。起点文様の逆「の」の字文は1ヶ所のみ。沈線→縄文R。A 2。
- b種（口縁部には5単位の突起をもつ）（13）13 口径14.5cm、底径6cm、器高16.5cm。沈線→刺突（6単位）。10の内部から出土。整形がやや粗い。
- C種（平縁）（14・15）14 沈線のみ。A 2。15 沈線→縄文L。A 2。
- 深鉢A型第4類（胴部が括れ、内面に2状の沈線文をもち、胴部には弧線文や対弧文が発達する）（16・17）
- a種（肩部に縄文帯をもつ）（16）16 忽らく3単位の突起をもつ。沈線→縄文L R。C 4。
- b種（肩部に連続刺突部）（17）17 胴部に弧線文。沈線→縄文L R。A 2。
- 深鉢A型第5類（胴部が括れ、羽状沈線文をもつ）（18）18 内面に2条の沈線。C 3。
- 深鉢B型（口縁が直立し、斜格子文をもつ）第1類（胴部上半に縄文帯をもつ）（19）19 沈線→縄文L R。A 1。
- 深鉢C型（胴部が括れ口縁がラッパ状に開き、羽状沈線文を施す）（21・22）21 A 2。22 橫位沈線→羽状沈線。A 1。
- 深鉢D型（口縁が緩やかに開き、連続押圧紐線文をもつ粗製土器）（23～25）23 口縁部にも押圧する。D 1。24 口径40cm以上の大型土器。D 1。25 D 11。
- 鉢A型（胴部が緩く彎曲する）第1類（波状部内面に連続刺突部をもつ）（26）26 沈線→縄文L R。A 1。
- 鉢A型第2類（肩部に連続刻み目をもち、口縁がやや内傾する）（27～32）
- a種（3単位の波状口縁をなす）（27・28）27 口径推定14.5cm、底径6.4cm、器高10.5cm。沈線→縄文L。D 14。28 口径推定18.5cm、底径8cm、器高18.2cm。沈線→縄文L R。A 2。
- b種（突起をもつ）（29）29 A 2。
- c種（平縁）（30～32）30 沈線→縄文L R。A 2。31 椎に近い器形。沈線→縄文L R。A 2。
- 32 小型土器。屯線→縄文L R。A 3。
- 鉢A型第3類（平縁で、口縁がほぼ直立する）（33～37）
- a種（沈線文のみ）（33）33 口径推定22cm。A 2。



第38図 出土土器実測図 (1/3)



第39図 出土土器実測図 (1/3)



第40図 出土土器実測図 (1/3)

b 種（1、2条の縄文帯をもつ）(34~37) 34 沈線文→対弧文→縄文L R。A 2。35 沈線→縄文L R。A 1。36 沈線→縄文L R。C 2。37 沈線→縄文L R→対弧文。A 1。

鉢A型第4類（口縁部に縄文帯をもつ）(38~42)

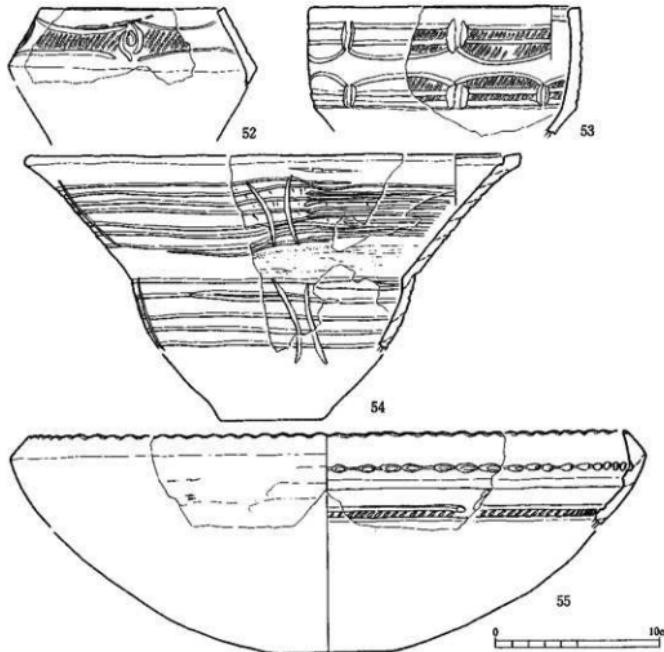
a 種（2条の沈線間に連続刺突文を施す）(38~41) 38 突起をもち、胸部を羽状沈線文となる。沈線→縄文L R。A 2。39 沈線→縄文R。胸部文様は不明。A 2。40 沈線→縄文L。C 3。口縁部には孔線文→縄文R。C 4。

b 種（連続刺突文をもたない）(42) 42 沈線→縄文L。A 1。

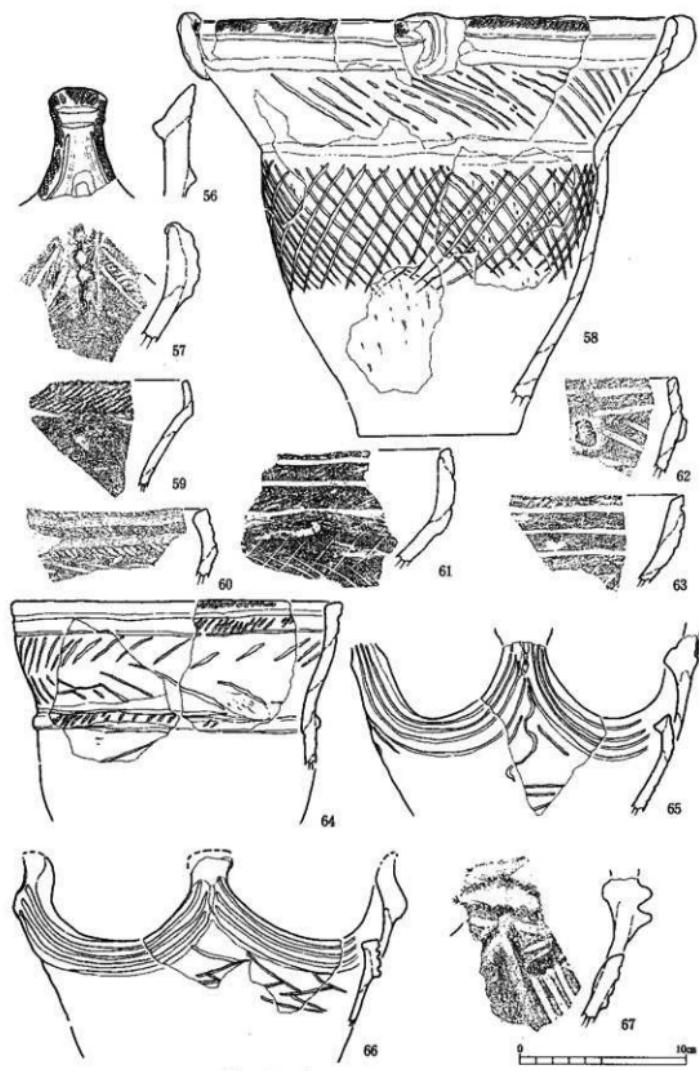
鉢B型（口縁部、又は胸部が内側に屈折する）第1類（入組文をもつ）(43~45) 43 口縁部、屈折部に連続刻み目をもつ。沈線→縄文L R。C 3。44 沈線→縄文L R。A 1。45 胸部は羽状沈線文。沈線→縄文L R。C 3。

鉢B型第2類（弧線文をもつ）(46~53)

a 種（連弧文をもつ）(46~50) 46 沈線→縄文L R。C 3。47 沈線→縄文R L。D 10。48 沈線→縄文L。C 3。49 沈線→縄文L。Z 2。第3群土器かもしれない。50 沈線→縄文L。変形した連弧文。



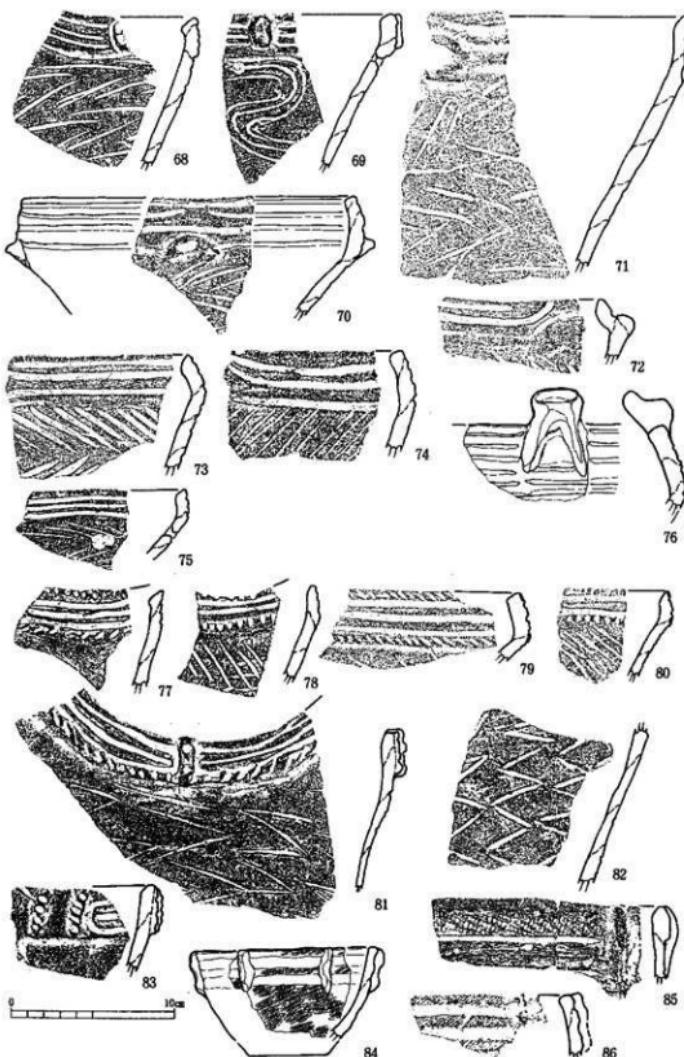
第41図 出土土器実測図 (1/3)



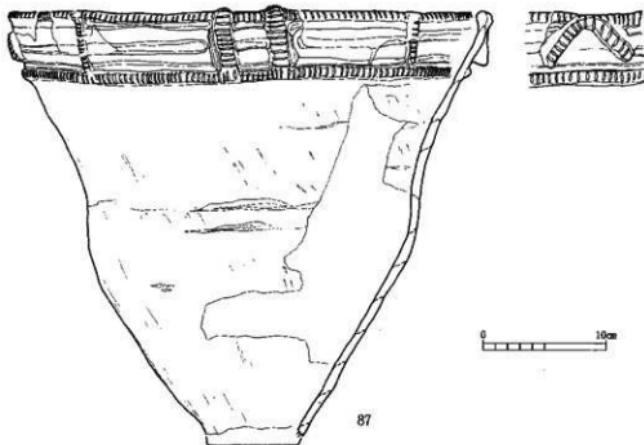
第42図 出土土器実測図 (1/3)

b種（横連対弧文をもつ）(51～53) 51 沈線→縄文L R。D 2。52 対弧文の内側は縄文を充填する。沈線→縄文L R。A 2。53 口縁はほぼ直立する。沈線→縄文L R。C 4。

鉢C型（胸部が括れ、口縁がラッパ状に開く）(54) 54 口径推定30cm。ヘラ削り→沈線→沈線部分の上下をヘラ磨き。A 1。



第43図 出出土器実測図 (1/3)



第44図 出土土器実測図 (1/4)

浅鉢 (55) 55 内面屈折部に連続刺突文。沈線間に刻み目。A 2。

第3群土器（曾谷、安行期の在地系土器群）

深鉢第1類（口縁部が屈折し、縄文帯をもつ）(56~64)

a種（波状口縁）(55・57) 56 波頂部は扁状突起に近い。沈線→縄文L R。D10。57 波頂部に押圧文をもつ垂下隆帯を貼付する。沈線→縄文L R。D11。

b種（平内）(58~63) 58 4単位の隆線を貼付する。沈線→縄文L R。C3・D2。59縄文L R。A2。60 やや幅広の沈線→縄文R L。胴部は羽状沈線文。D10。61 沈線→縄文L。A1。62沈線→縄文L R。梢円形隆線文を貼付する。D2。63 沈線→縄文L。胴部は羽状沈線文。3号配石付近。64 脇部の括れ部の隆線上に縄文を施す。沈線→縄文L。D11。

深鉢第2類（口縁部が屈折し、3~6条の沈線文を施す）(65~76)

a種（波状口縁）(65~68) 65 波頂部から蛇行沈線が垂下する。3号配石付近。66 C2。67 やや幅広の沈線上に隆線を貼付する。D11。68 口縁部に沈線で梢円を描き、2つの刺突を加える。グリッド不明。

b種（平縁）(69~77) 69 口縁部に縦位に押圧を加えた梢円形の貼付文がある。胴部には棒状工具による3条の蛇行沈線が垂下する。D11。70 痕状の貼付がある。D11。71 やや幅広の沈線上に隆線文を貼付する。Z4。72 痕状貼付上で沈線が強くカーブする。胴部は羽状沈線文。D11。73 口径推定38cm。D11。74 D11。75 口縁部外面に赤色塗彩する。D1。

C種（突起をもつ）(76) 76 逆V字の頂部を押圧したような突起。A4。

深鉢第3類（2、又は3条の沈線文の上下に連続刺突文、又は連続刻み目を加える。）(77~80)

a種（波状口縁）(77・78) 77 C1。78 C1。

b種（平内）(79・80) 79 D12。80 D11。

深鉢第4類（3条の沈線文上に刻み目のある垂下隆帯を1本、又は2本貼付する。）(81~84)

a種（波状口縁）(81・82) 81 脊部は雷文状の羽状沈線文。D11。82 口縁部はないが81と同種であろう。D12。

B 3式である。表示した資料が示すとおり、本遺跡では加曾利B 1式の資料は豊富であるが、加曾利B 2・3式になると非常に乏しい状況にある。従って本稿では加曾利B 1式段階の資料のみについて段階的な変遷を考えてみたい。まず加曾利B 1式段階の精製深鉢は、文様的に見た場合、逆「の」の字状の起点文の発生から消滅（或いは衰退、退化）に特徴を見い出すことができよう。この点について（安孫子 1982）では、逆「の」の字・三角枠が描かれる段階と、川の字形に簡略化される段階の2段階を設定している。ところが、青木遺跡の資料を整理する中で、2段階のほかに起点文が発生しない第1類を抽出することができた。これらは大波状、或いは波状口縁を呈し、波状部内面に連続刺突部をもつ。更に波状部の口唇部は細かい小波状をなす。突起は耳状にはほど遠い形態である。第1類の類例には僅かながら起点文を伴う例も稀にある。しかし大半の資料には見ることができないため、起点文が発達しない段階として1段階設定し、加曾利B 1式を3段階に細分したい。このほか深鉢B型～浅鉢までの土器群については、表示した資料が少ないので、深鉢A型の加曾利B 1式と同じレベルで細分することは不可能である。取て土器型式だけ当てはめると、深鉢B型は加曾利B 1式、深鉢C型は加曾利B 2～3式、深鉢D型は加曾利B 2式以降、鉢A型第1～3類は加曾利B 1式、第4類は加曾利B 2式以降、鉢B型は加曾利B 2式以降、鉢C型は加曾利B 3式、浅鉢は加曾利B 1式と考えられる。この中で、深鉢D型は関東地方に類例が少なく、地域色の濃いどこ群である。また鉢A型第4類a類の38は、埼玉県大矢場貝塚例（安孫子 1982）の突起に酷似することから加曾利B 2式でも古い段階に属することにならうが、脣部には既に羽状かと思われる沈線文が発生している。鉢B型は、連弧文、弧線文等の加曾利B 2式以降に特徴的な文様のみが施文されていることから、加曾利B 2式に発生したものであると考えられる。有名な大森貝塚のそろばん玉状の鉢形土器の組列も、恐らく鉢B型と同じ段階で発生したものであろう。鉢C型の位置づけは難しいが、（鈴木正 1980B）の大森貝塚資料中の加曾利B 3式大森系列（大森3式）とされる土器に類似した逆対弧状の文様を見ることができる。従って段階的に、更に系統的にも大森貝塚例と同じである可能性が高い。尚、本資料は青木遺跡で唯一のものである。

第3群土器は、從来山梨県内では殆ど報告がなかった一群の土器であり、量的には決して多くはない。この中で、第4類については安行2式の紐線文系土器との類似性、特に2本単位の刻み目のある垂下降線から安行2式に併行するものと考えたい。第1～3類については、とりあえず曾谷～安行1式に併行する土器群として把えておくが、中でも58・64は曾谷式併行の在地系土器であると考えられる。最後に、第4群土器は安行1式土器である。山梨県内で確実な安行式土器が報告されるのは今回が始めてではなかろうか。

## (2) 土偶 (88～97)

土偶は、図示した他に中期土偶脚部2点、後期土偶脚部10点があり、出土した総数は22点である。88 口から咽にかけて貫通孔がある。D11。89 髪形まで具体的に表現する。頭頂部から咽にかけて貫通孔があるほか、木芯痕が観察できる。A 2。90 ほぼ全面に赤色塗彩を施す。グリッド不明。91 沈線端部に刺突を加える特徴から掘之内期の所産であろう。D11。92 腹部は欠損するが、妊娠土偶であろう。A 1。93 腰部の鋸葉状文は、福島県上岡遺跡の有名な「坐せる土偶」にもみられ、東

北から中部山岳地帯にかけた広範囲に、主に加曾利B期の土偶のみに用いられた特殊な文様である。沈線→縄文L R。腹部中央に孔があり、股間からの孔と接続する。また胸部には木芯痕がある。3号配石付近。94 93と同種の鋸葉状文を施す。首と腕の付け根部分に接合痕が残る。また股間部から胸部にかけて木芯痕がある。A 2。95 胸部。C 3。96 膝頭の表現がある左足片。A11。97 胸部。C 3。

(3) 矢子形土製品 (98~101)

総数4点が出土した。98 長軸長5cm。短軸長3cm。焼成前の孔が貫通する。内面にスス状の付着がある。重量11.7g。4号住居址。99 把手部に横方向の孔がある。A 1。100 D11。101 孔なし。C 3。

(4) 耳 桿 (102・103)

僅か2点出土した。102 外径4.3cm、内径2.3cm、重量22.3g。内側に三叉文を陰刻し、赤色塗料を充填する。A 5。103 直径2cm、重量4.8g。表面は粗い整形。A 1。

(5) スタンプ形土製品 (104)

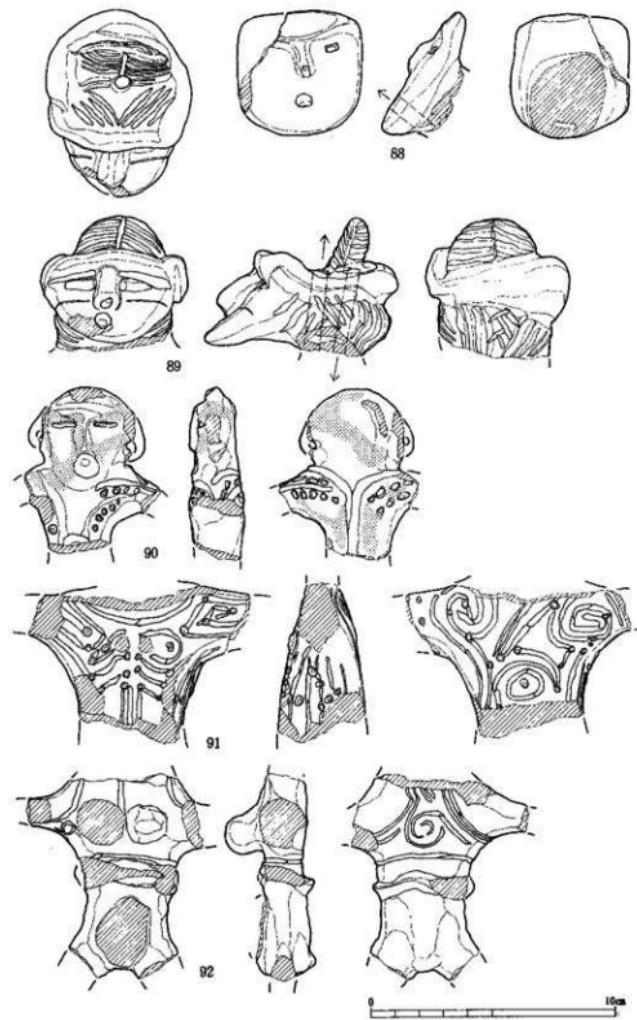
1点のみ。104 スタンプ面の直径4cm、長軸長4cm、重量33.3g。スタンプ面に渦巻き文を施す。A 2。加曾利B式に伴うとされるが、山梨県では初の発見で、全国的にみても分布・時期・用途は必ずしも明らかにされていない。

(6) 石 棒 (105・106)

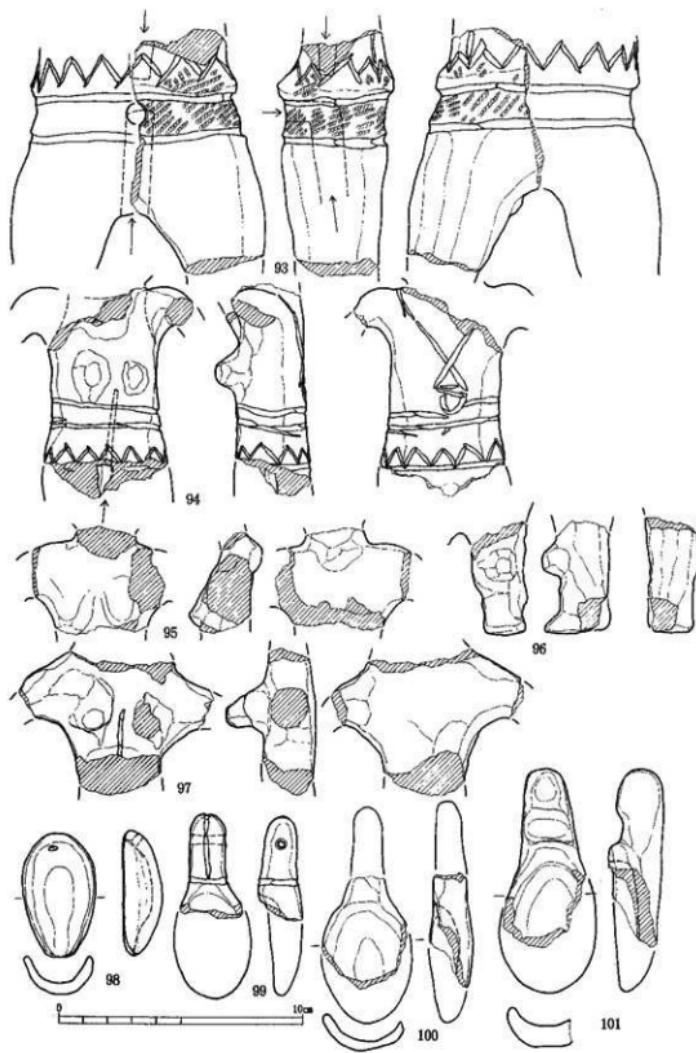
総数は不明であるが、小形有頭2本のみ図示した。105 頭部に十字の彫刻がある。緑色片岩製。3号配石付近 (Z 5)。106 矢羽根状の連続刻み目を施す。粘板岩製。2号配石付近。

(7) 浮子状石製品 (107・108)

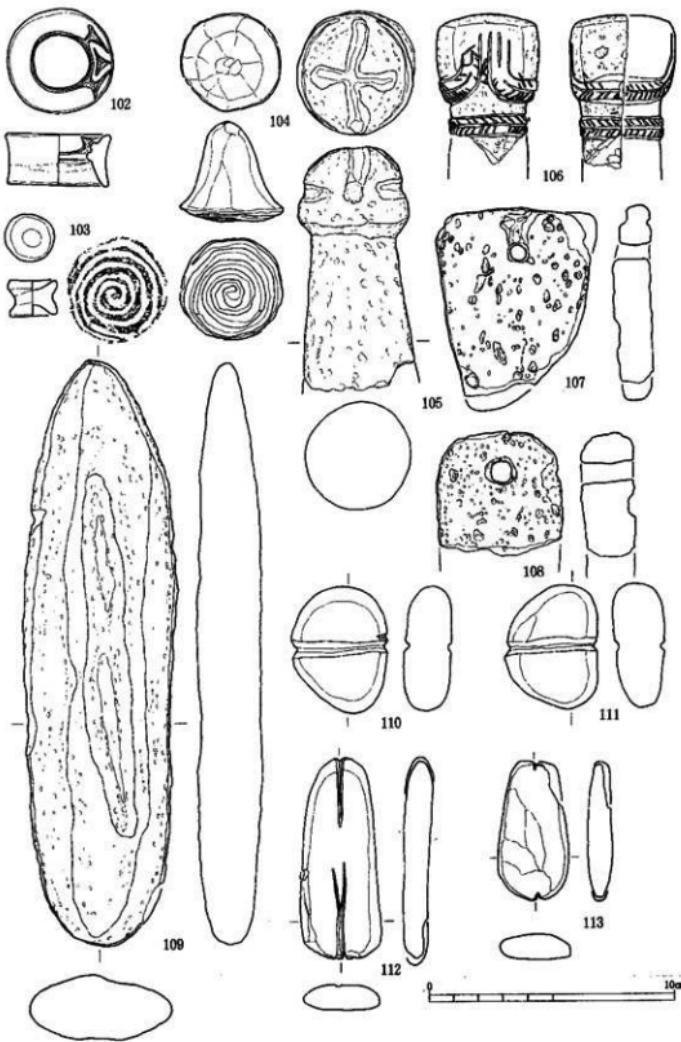
総数3点のうち2点のみ図示した。107 軟質の軽石製。表採。108 軽質の軽石製。A 2。



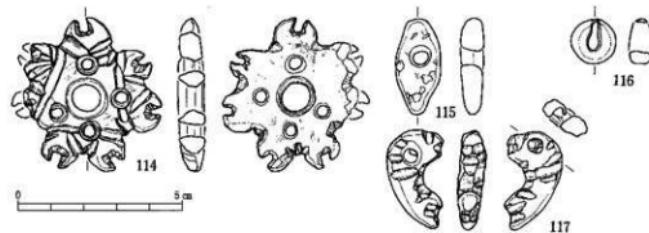
第45図 土偶実測図 (1/2)



第46図 土偶・杓子形土製器実測図 (1/2)



第47図 耳栓・スタンプ形土製器・石棒・浮子状石製器・砥石・石錐実測図 (1/2)



第48図 石製装身具実測図 (2/3)

#### (8) 砥石 (109)

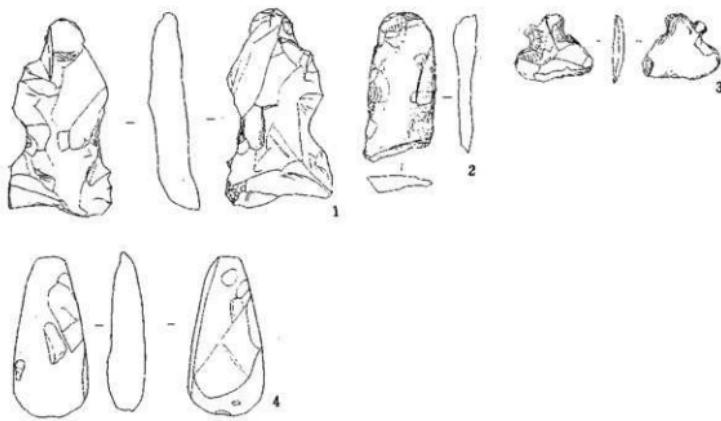
数点出土した。109 長軸長23.7cm、短軸長6cm、厚さ2.5cm、重量424g。最大級の砥石である。砂岩製。グリッド不明。

#### (9) 石錘 (110~113)

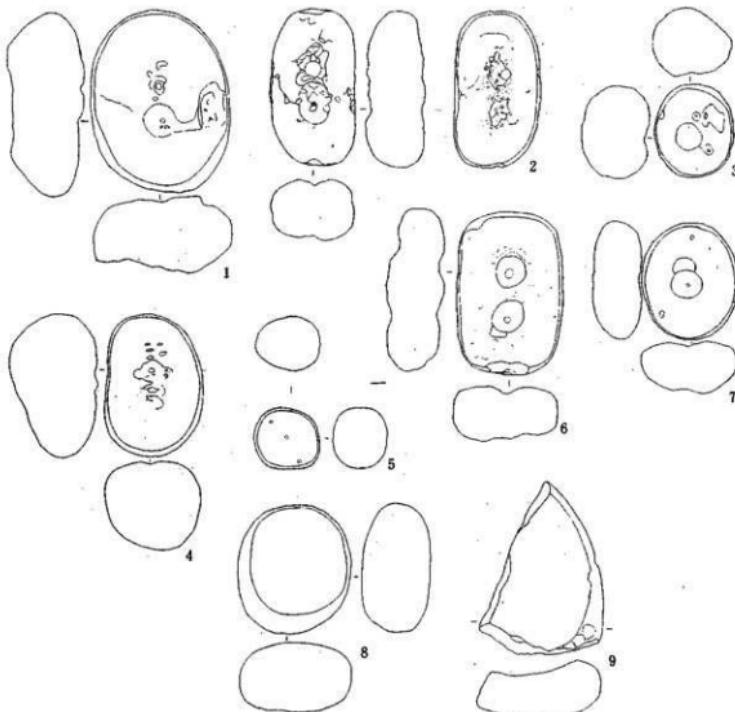
19号石棺内からほぼ同じ形態を示す110・111が出土したが、出土状況・形態ともにやや特殊である。図示した他に礫石錘が数点出土している。110 長軸長5cm、短軸長3.3cm、42.9g。安山岩製。19号石棺内。111 長軸長5.1cm、短軸長3.6cm、47.4g。安山岩製。19号石棺内。112 長軸長8cm、短軸長3.2cm、40.3g。シルト岩製。C11。113 長軸長5.6cm、短軸長2.8cm、20.4g。擦痕あり。粘板岩製。A2。

#### (10) 石製装身具 (114~117)

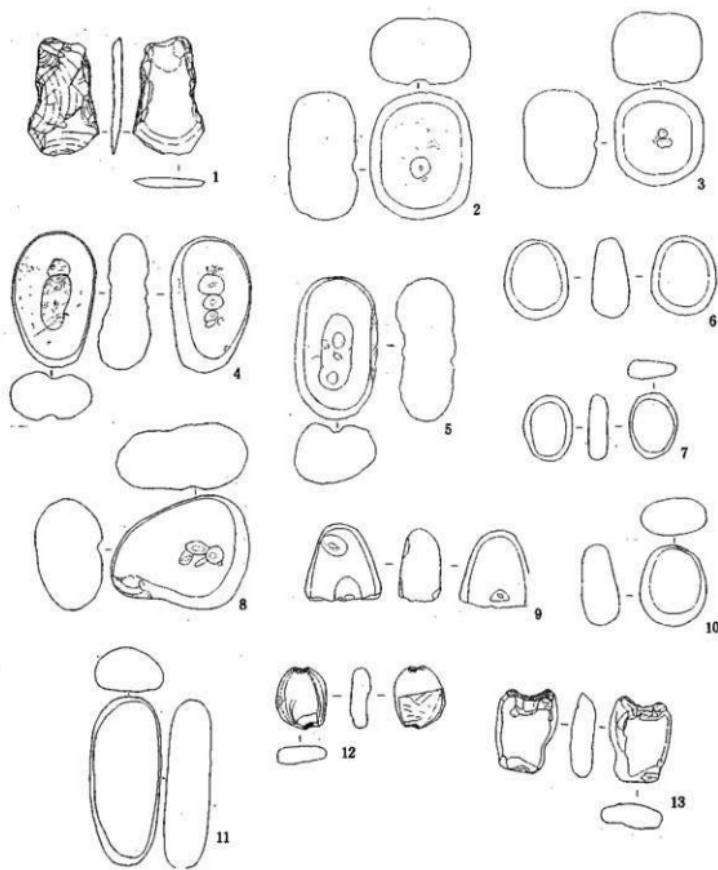
図示した他に、中期以前に属する蛇紋岩類型の 状耳飾が1点検出されている。114 7箇所の突出部をもち、蛇紋岩類製。3号住居址。115 直径0.4cmの孔をもつ。長軸長3cm、短軸長1.3cm、3.5g。蛇紋岩類製。グリッド不明。116 直径1.4cm、重量1.8g。滑石類製。グリッド不明。117 勾玉状を呈し、直径0.4cmの孔をもつ。最大長3cm、重量3.9g。滑石類製。グリッド不明。



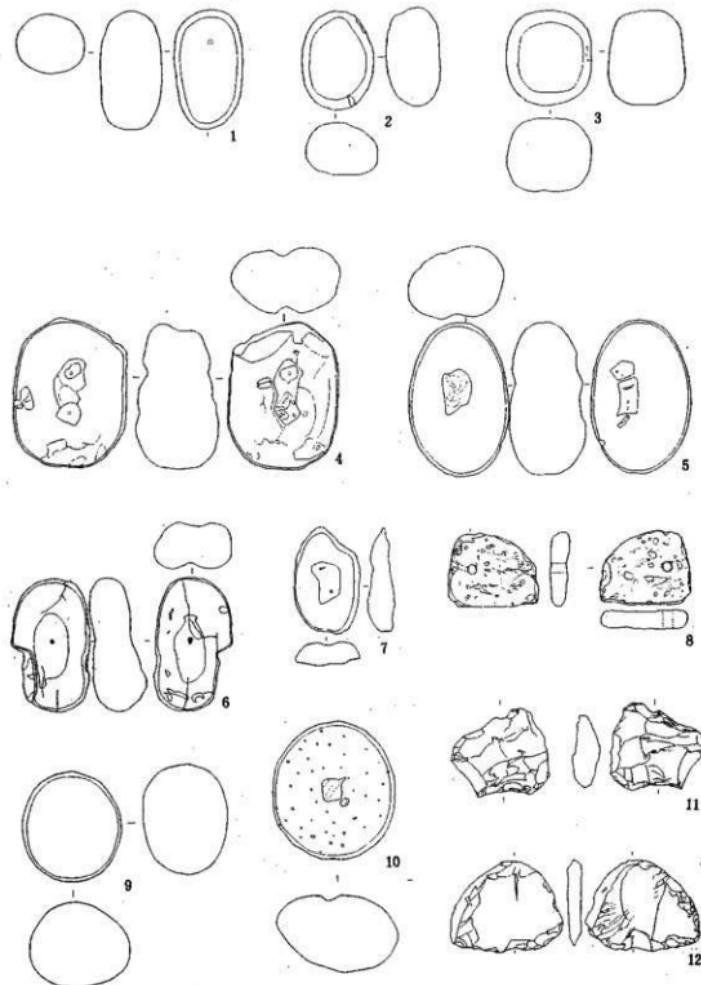
第49図 1号住居址出土遺物実測図 (1/3)



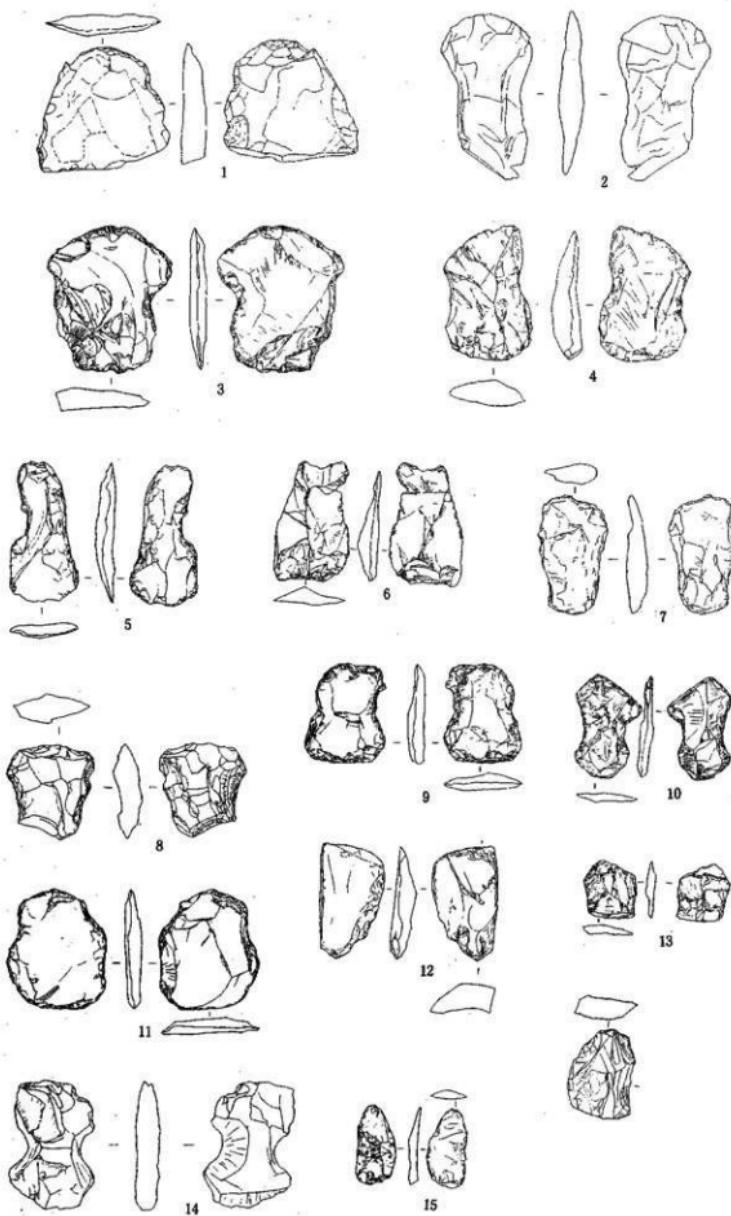
第50図 4号住居址出土遺物実測図 (1/3)



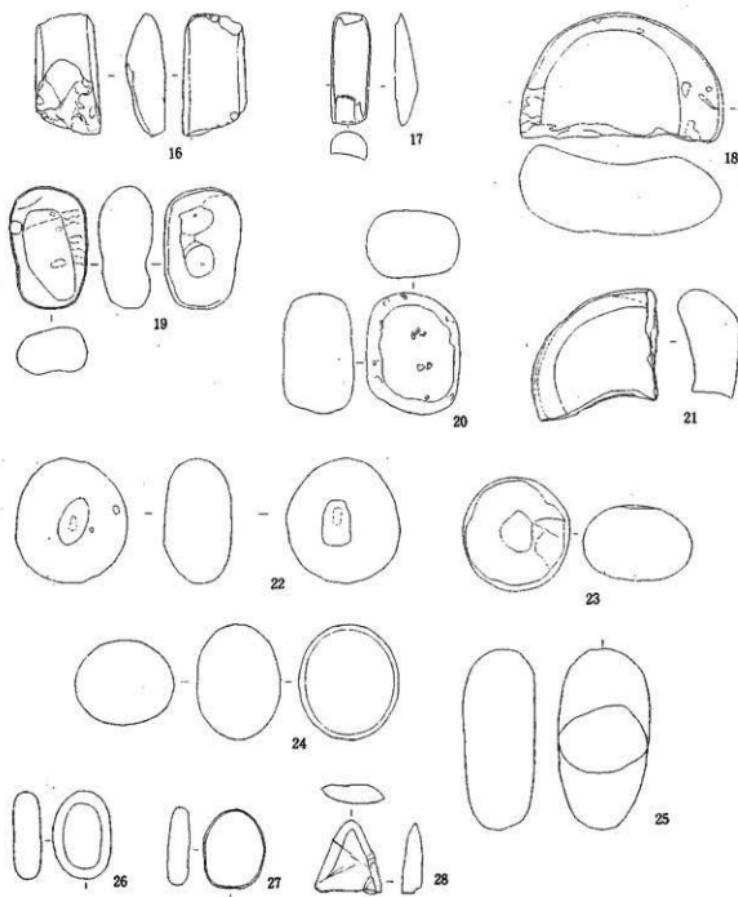
第51図 5号住居址出土遺物実測図 (1/3)



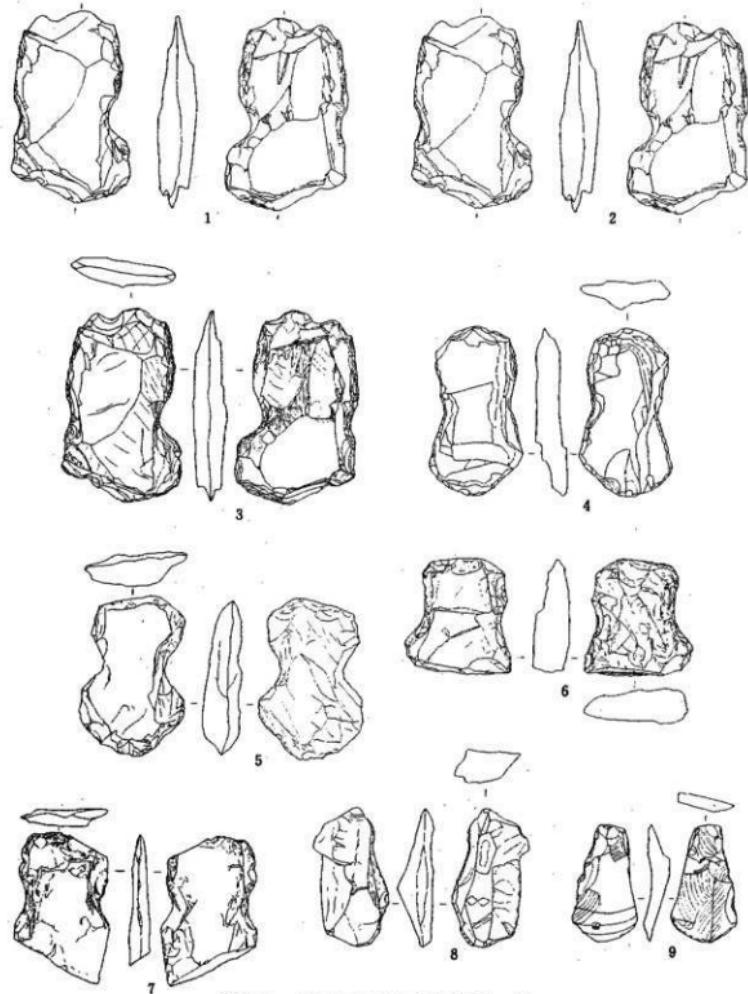
第52図 6・7・8・9号住居址出土遺物実測図 (1/3)



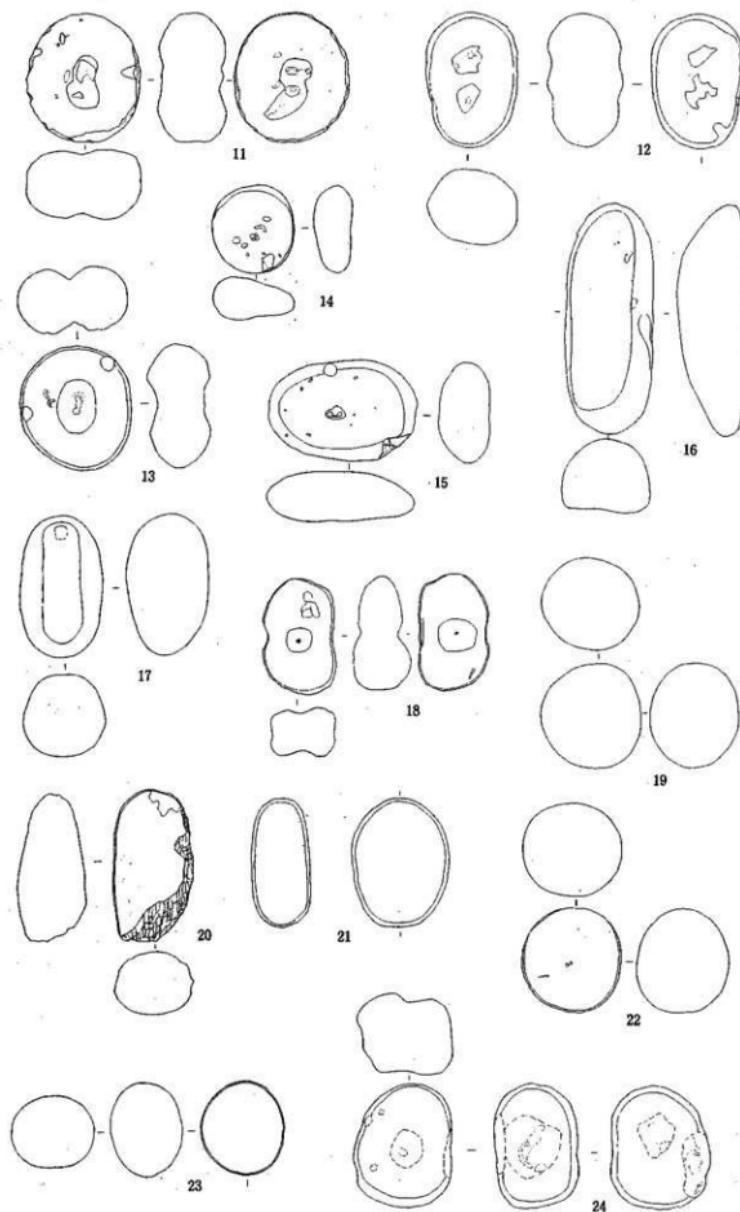
第53圖 1號集石出土遺物實測圖 (1/3)



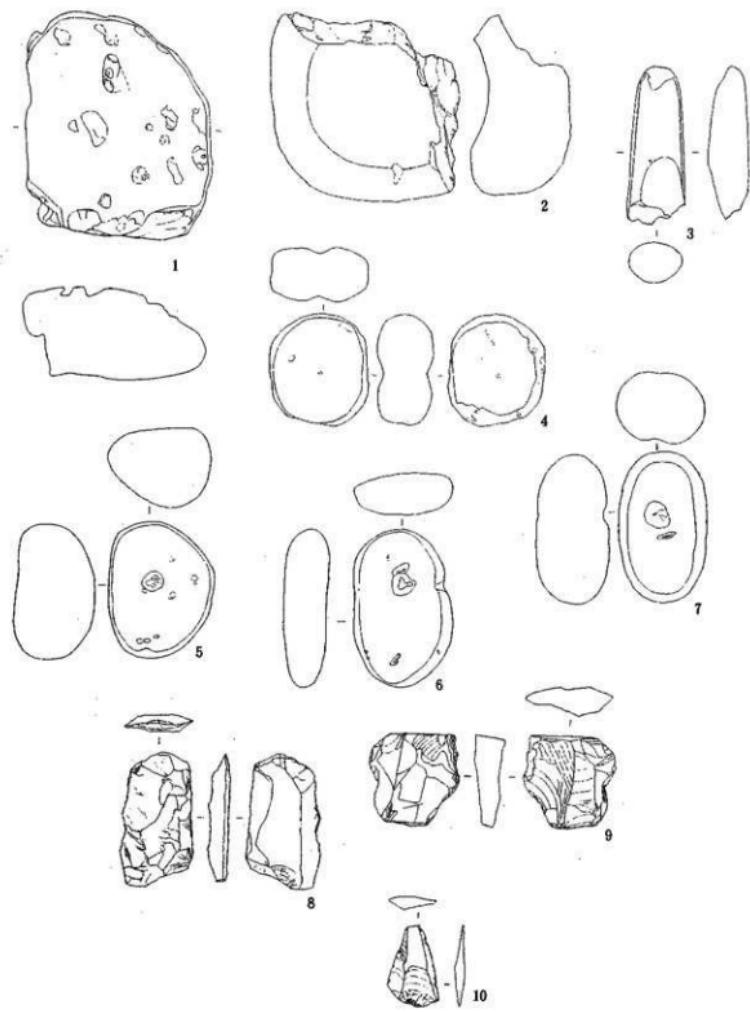
第54図 1号集石出土遺物実測図 (1/3)



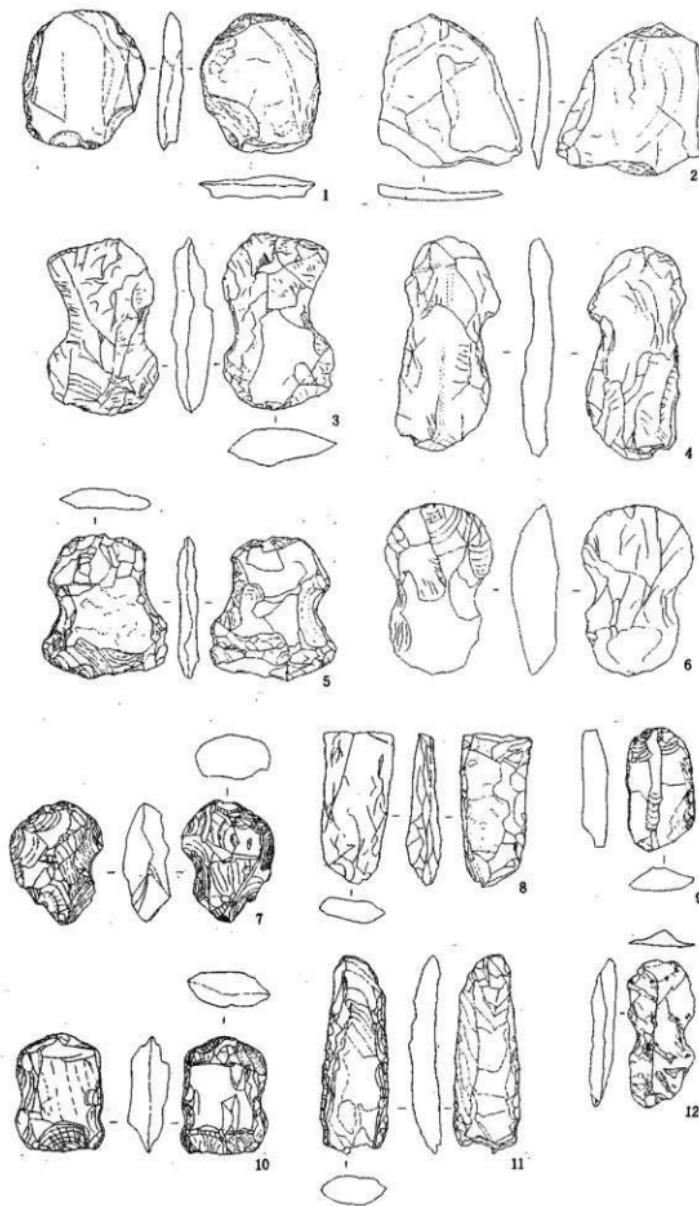
第55図 2号集石出土遺物実測図 (1/3)



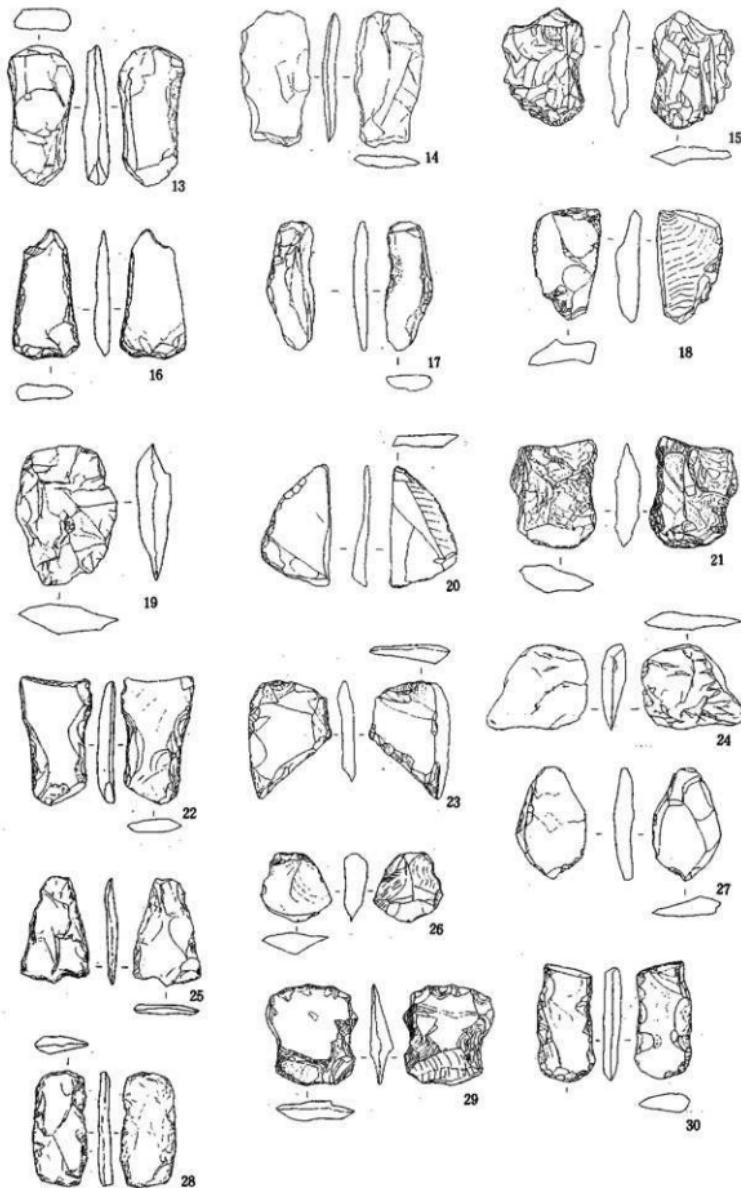
第56図 2号集石出土遺物実測図 (1/3)



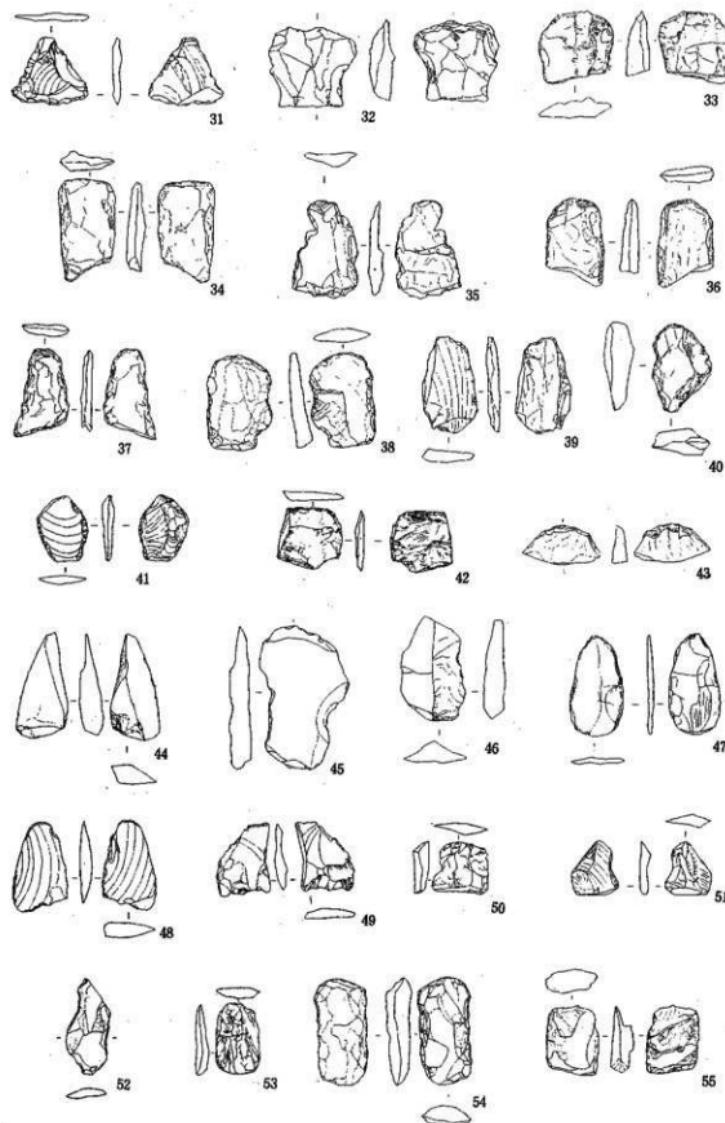
第57图 3号集石出土遗物实测图 (1/3)



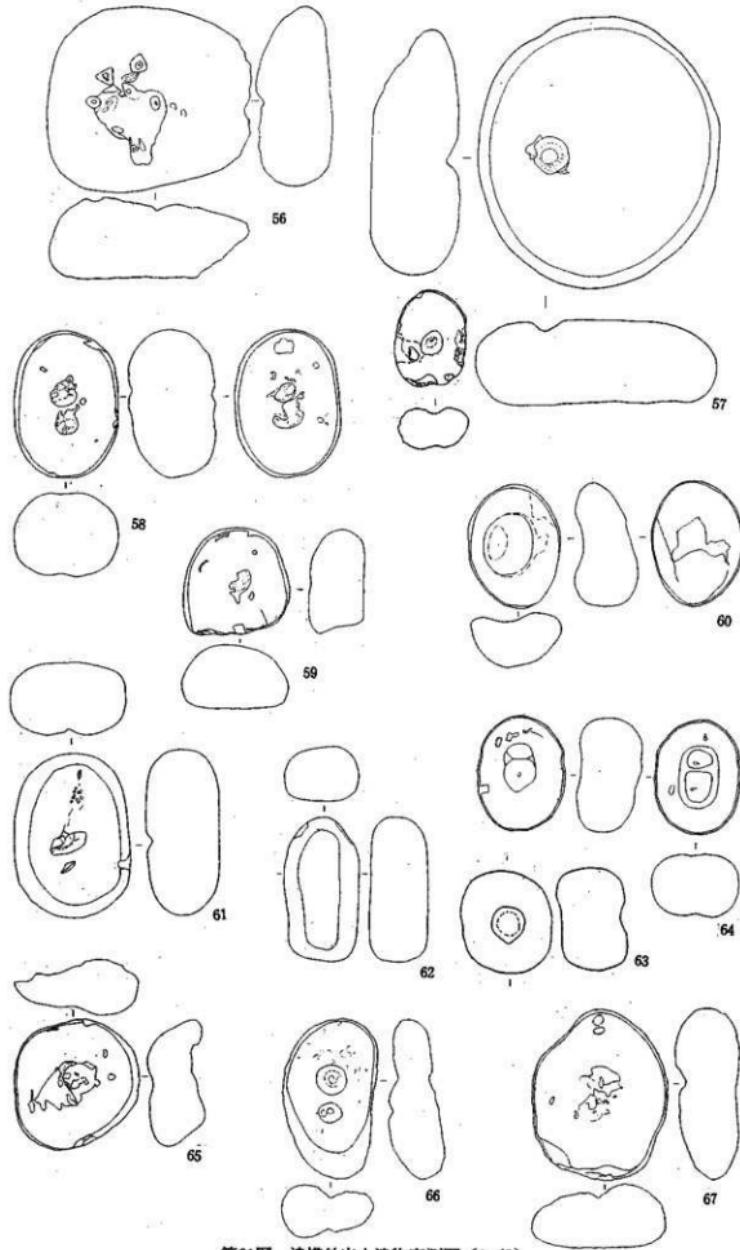
第58図 遺構外出土遺物実測図 (1/3)



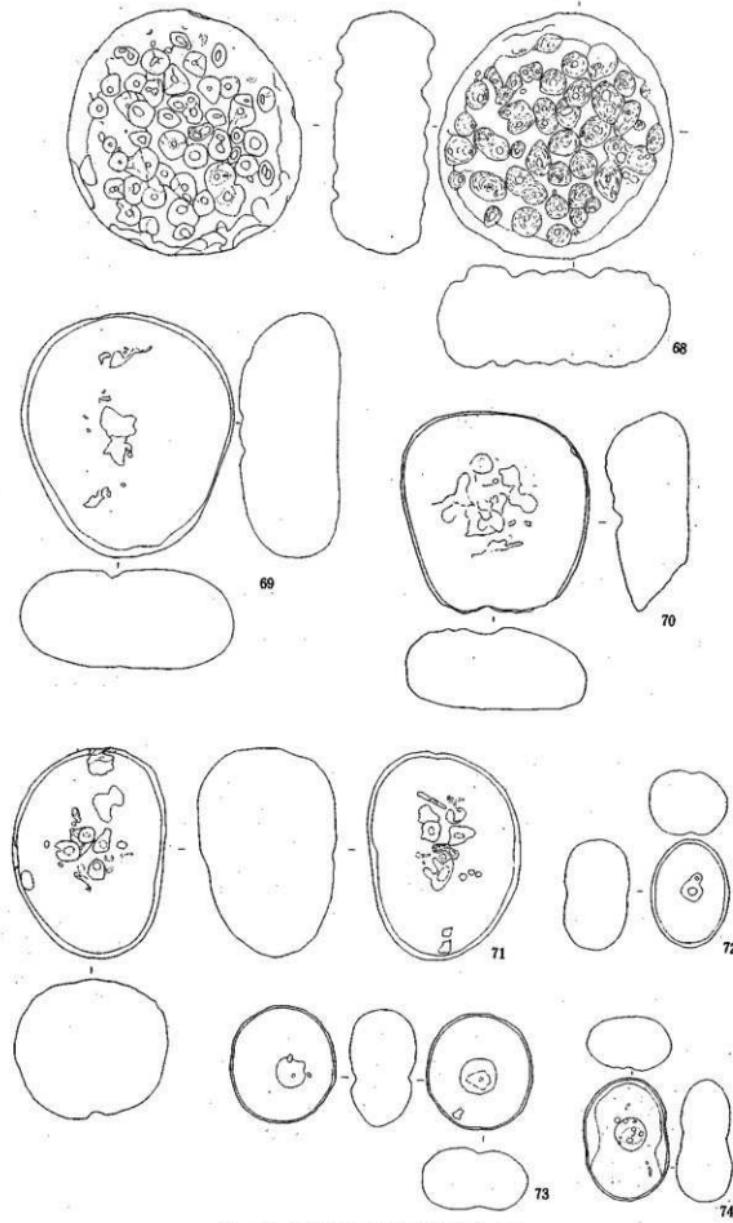
第59図 遺構外出土遺物実測図 (1/3)



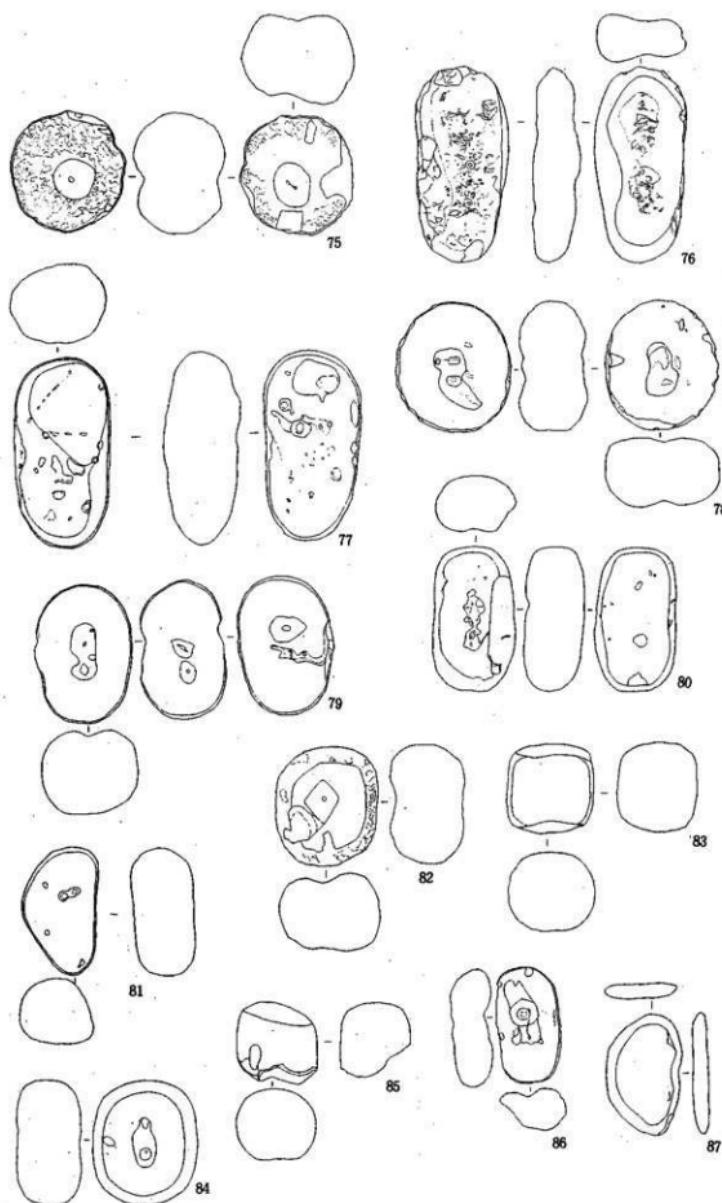
第60図 遺構外出土遺物実測図 (1/3)



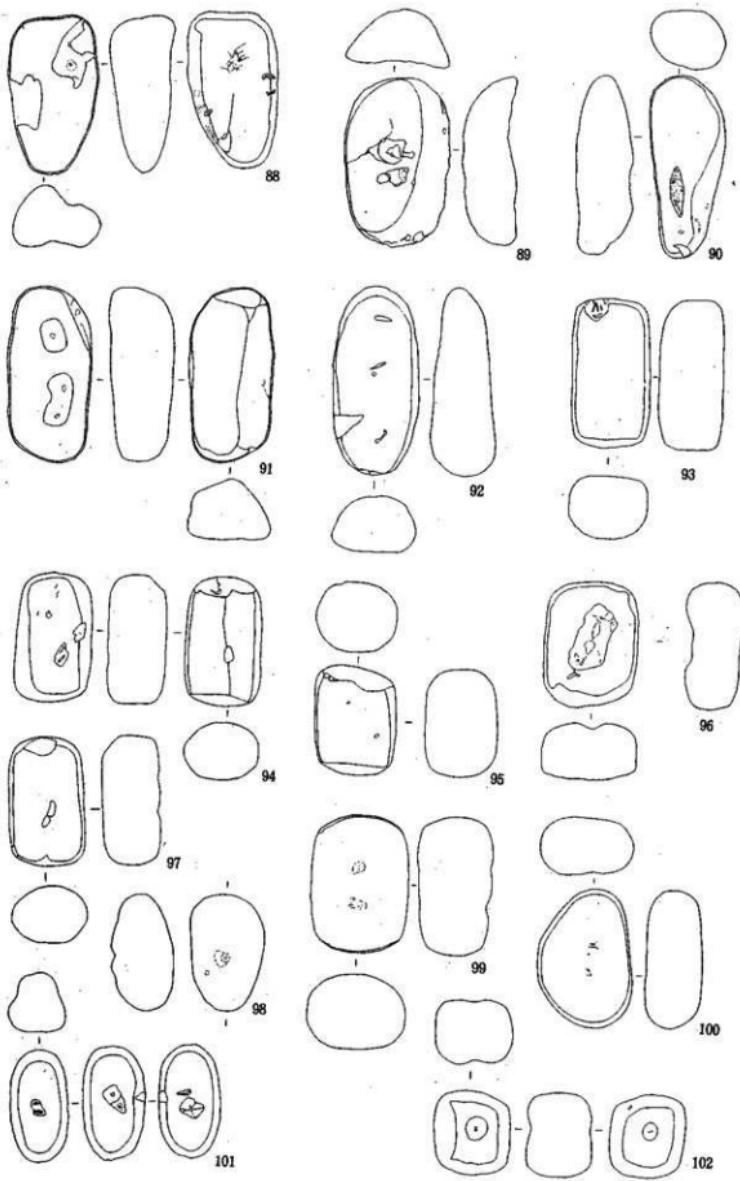
第61図 造構外出土遺物実測図 (1/3)



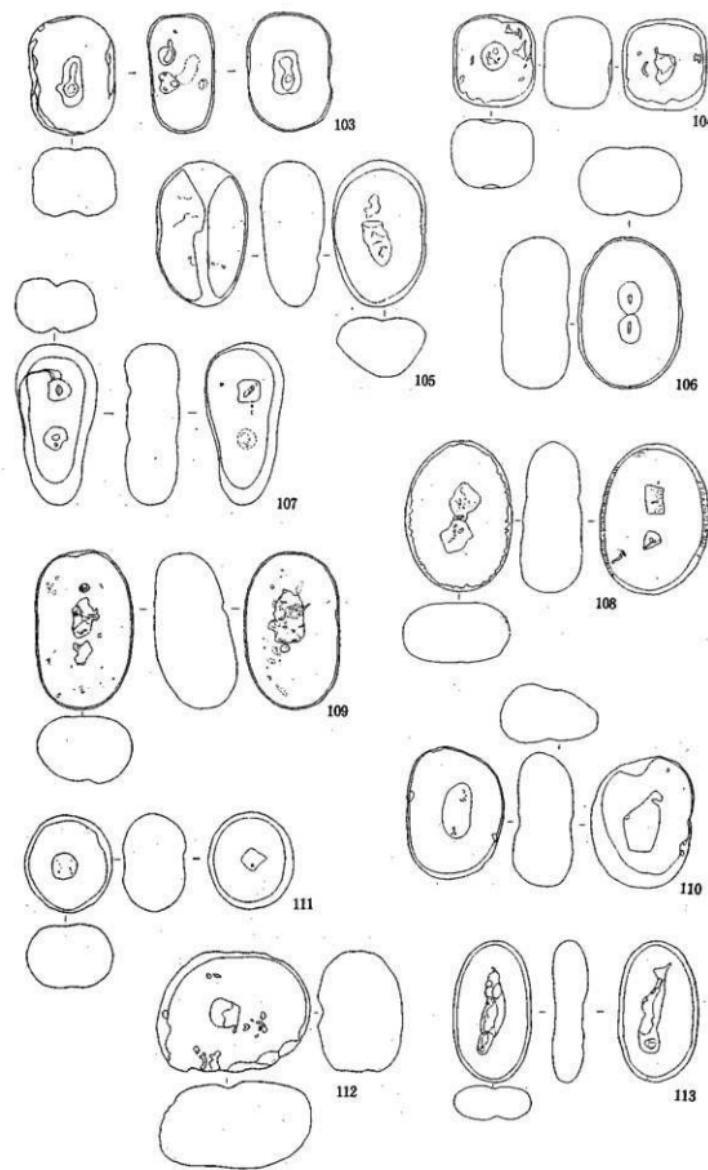
第62図 遺構外出土遺物実測図 (1/3)



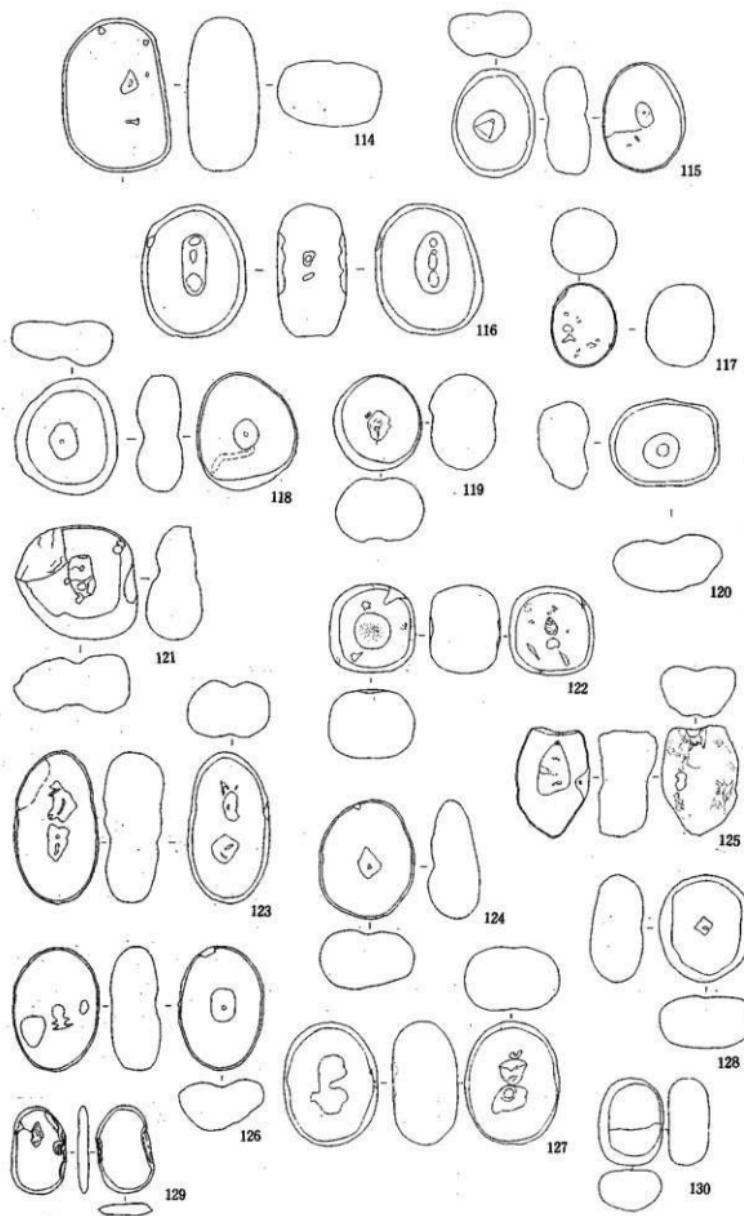
第63図 遺構外出土遺物実測図 (1/3)



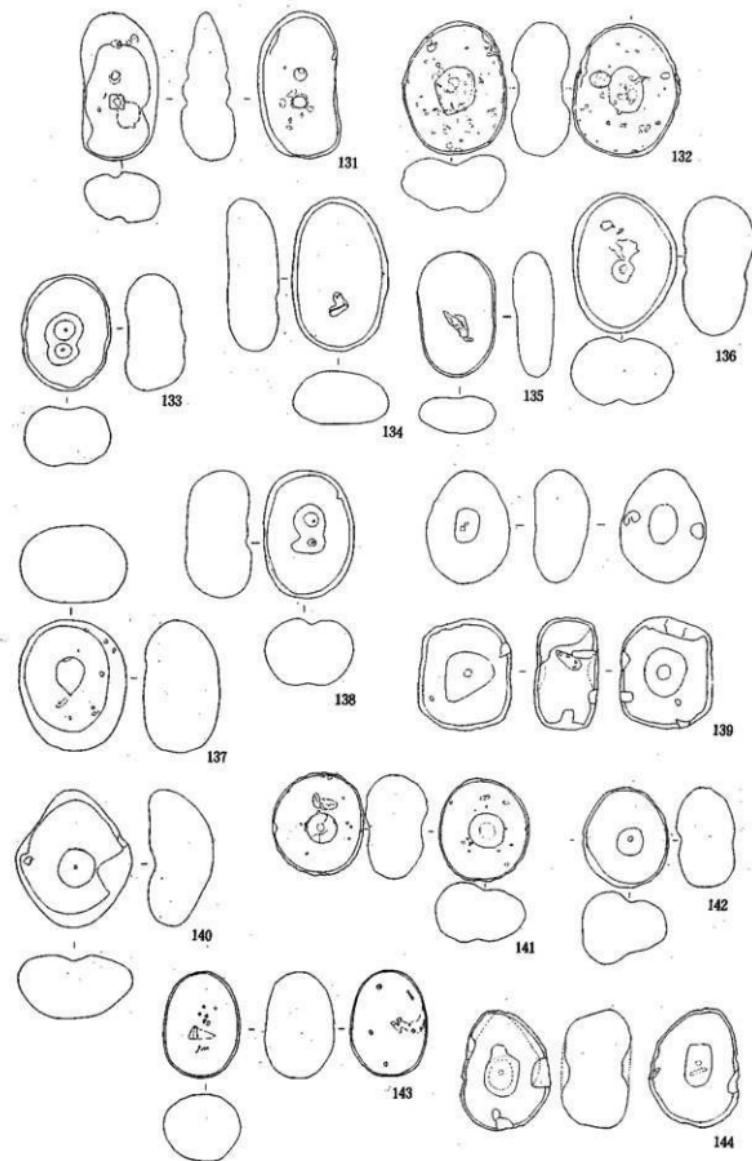
第64図 遺構外出土遺物実測図 (1/3)



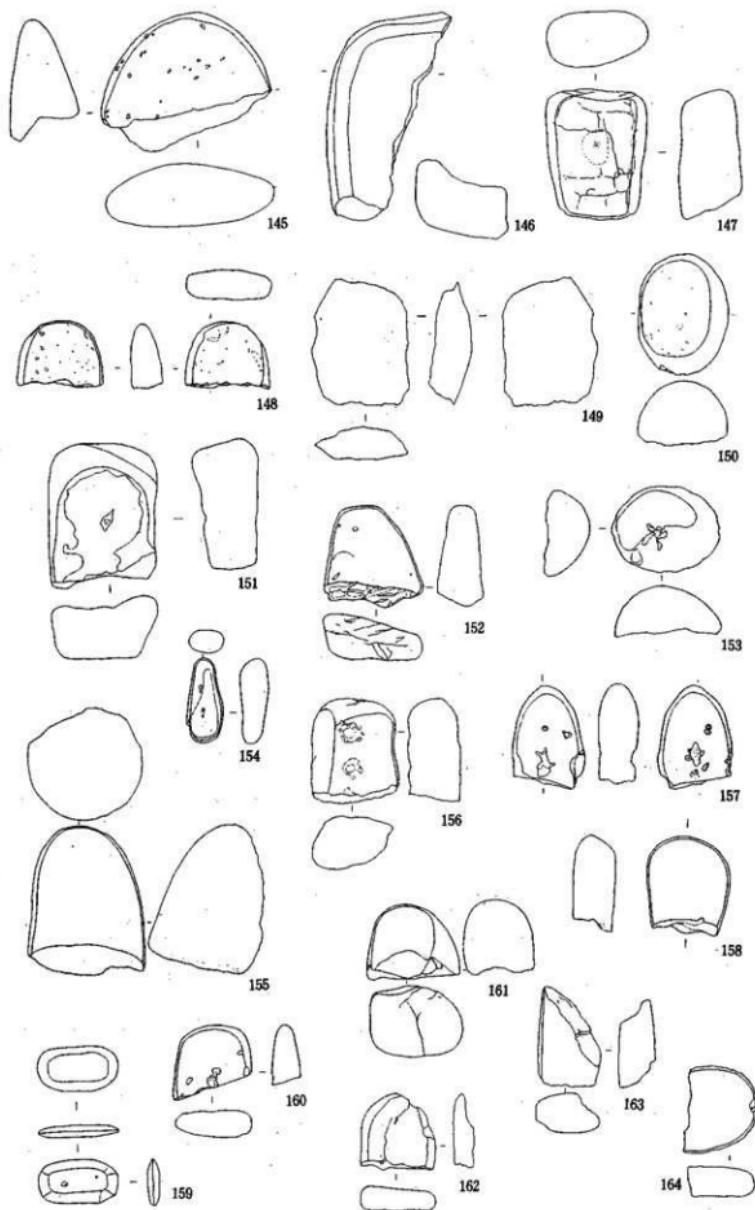
第65図 造構外出土遺物実測図 (1/3)



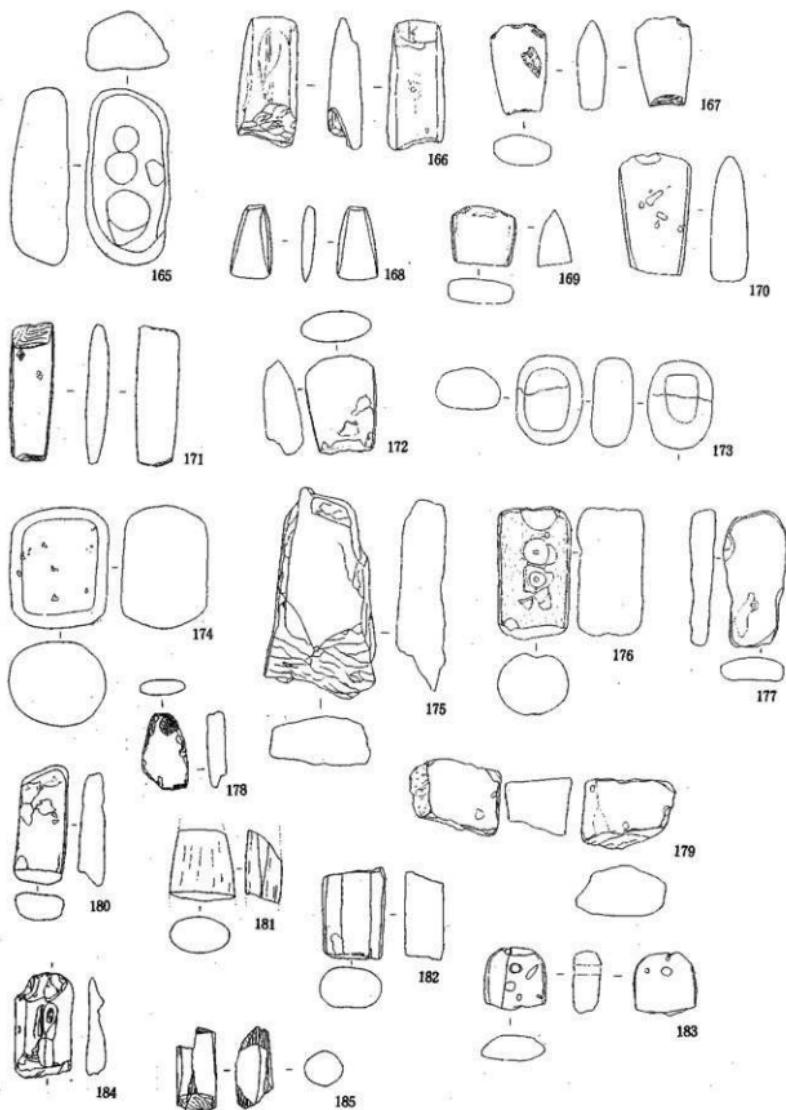
第66図 遺構外出土遺物実測図 (1/3)



第67図 造構外出土遺物実測図 (1/3)



第68図 遺構外出土遺物実測図 (1/3)



第69図 造構外出土遺物実測図 (1/3)

#### iv まとめ

最後に青木遺跡の調査成果と提起される問題点を指摘して総括したい。まず成果として挙げたことは、①検出された住居址群と石棺群・配石群は、ほぼ同期の集落内における諸要素として包括的に捉えられる可能性が高いこと。②大型の配石遺構（1～3号配石）は、主に石棺群の構築を基礎に形成されたもので、配石形成までは一連の行為であること。③石棺は、主軸方向を揃えて並列する特質をもち、主に主軸方向にほぼ3傾向を看取できたこと。④加曾利B式は3細分される可能性があること。⑤山梨県内では従来報告例が少なかった曾谷、安行1・2式期土器群を抽出できること。⑥加曾利B式に伴う土偶に特徴的な鋸歯状文の分布が、東北から中部山岳地帯にかけた広範囲であることを指摘できること。⑦山梨県内で初めてスタンプ型土製品が検出されたことなどである。

次に問題点を石棺に絞って提起したい。石棺は石棺墓である蓋然性が極めて高いため、石棺を墓壙としてみた場合、本遺跡では石棺の規模から伸展葬が主体的であると推定できる。しかも石棺の約半数に蓋石が遺存したことから、本遺跡の場合本来蓋石が伴うと判断できよう。更に石棺群の構築後に配石が形成されたことと、祭祀遺物が散在することから長期間にわたって何らかの祭祀行為が連續と継続されたことが想定できる。とすれば、石棺群は重葬形態の墓域として、土器型式を超えた長期間の使用が行われたと考えわれないだろうか。また縄文時代全般を通して屈葬が支配的な中で、とりわけ該期に伸展葬が盛行したと推定される点は、石棺の出現と合わせて重要な問題である。しかも墓域が祭祀場としての性格を強く帯び、墓域=祭祀場という関係を明確にするのも該期の特徴であろう。従って祭祀内容そのものも葬送観念の強いものではなかったろうか。このような形態の石棺は、後期中葉、特に加曾利B期において長野県～群馬県にやや多くの類例が知られているが、それ以前には全くないものである。縄文時代の墓制の中で、この大きな画期をどのように位置づけ、理解したらよいかが今後の課題である。

# 図 版

海道前遺跡 図版 1

1号住居址



1号住居カマド址



2号住居址



海道前遺跡 図版2

3号住居址



3号住居カマド址(断面)



1号土坑

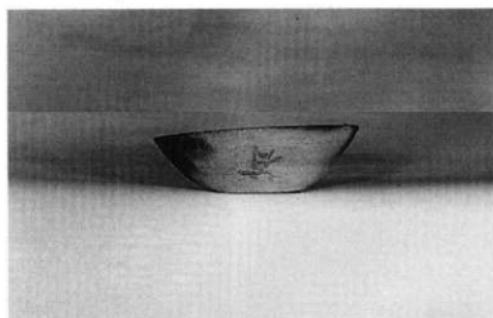


海道前遺跡 図版3

四耳壺



墨書土器(内黒)



青木遺跡 図版 1



1号集石造構(西側より)



2号集石造構(西側より)



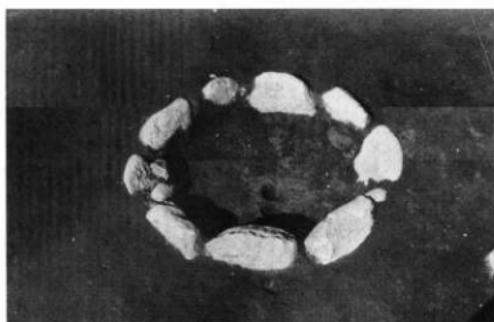
3号集石造構(南側より)

青木遺跡 図版2

1号住居址



1号住居炉址



2号住居址



青木遺跡 図版3

2号住居炉址



3号住居炉址



4号住居址



青木遺跡 図版4

5号住居址  
(石棒を使用した配石遺構)



8号住居址



10号住居址



青木遺跡 図版5



14号住居炉址



1号埋甕



2号埋甕

青木遺跡 図版6

1号土坑



3号石棺



6号石棺



青木遺跡 図版7

7号石棺



8号石棺



9号石棺



青木遺跡 図版8



10号石棺



11号石棺

青木遺跡 圖版9



12号石棺



13号石棺



14号石棺



15号石棺

青木遺跡 図版 10

16・17号 石棺



18号 石棺



19号 石棺



青木遺跡 図版 11

20号石棺



土器



土器



青木遺跡 図版12

土 器



土 器

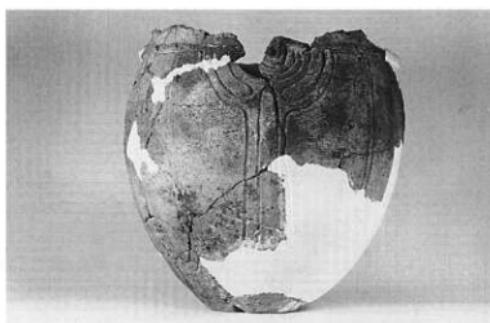


土 器



青木遺跡 図版13

土 器



土 器



浅鉢形土器



青木遺跡 図版14

ミニチュア土器



ミニチュア土器



土 製 品 (匙)



青木遺跡 圖版 15

土 偶



土 偶



土 偶

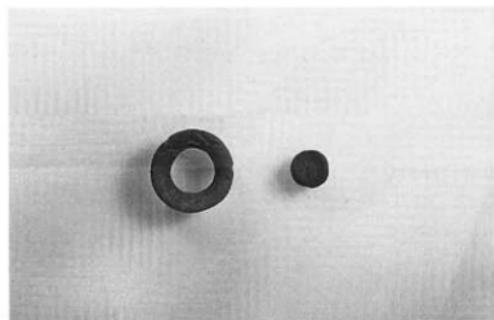


青木遺跡 図版 16

土 製 品



土 製 耳 飾



磨 製 石 斧

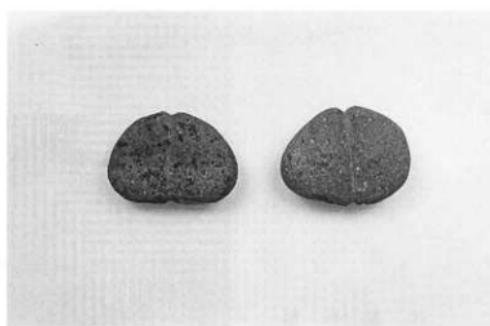


青木遺跡 図版17

石 錘



石 錘

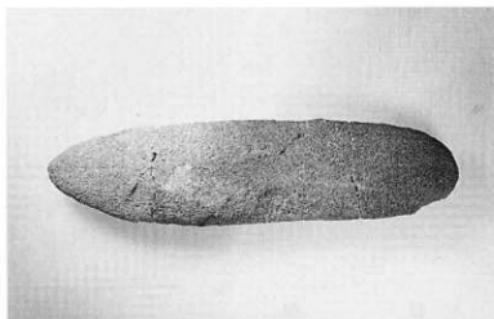


砥 石



青木遺跡 図版 18

砥 石



輕 石 製 品



石 棒(頭 部)



青木遺跡 図版19



腰 飾

## 報 告 書 概 要

|         |  |
|---------|--|
| ふりがな    | かいどうまえいせき、あおきいせき、けんえいはじょうせいびじぎょうにともなうまいぞうぶん<br>かざいはくくつちょうさはうこくしょ |
| 書 名     | 海道前遺跡、青木遺跡、県宮は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書                               |
| シリーズ名   | 高根町埋蔵文化財   |
| シリーズ番号  | 第12集   |
| 編 著 名   | 雨宮 正樹  |
| 発 行 者   | 高根町教育委員会   |
| 所 在 地   | 〒408-0002 山梨県北巨摩郡高根町村山北割 3261番地 TEL 0551-47-3111                 |
| 印 刷 所   | アートプリント社 〒407-0024 山梨県南都留市本町一丁目 17番30号 TEL 0551-22-0840          |
| 発行年月日   | 平成10(西暦1998)年3月31日   |
| ふりがな    | かいどうまえいせき  |
| 所 収 遺 跡 | 海道前遺跡  |
| 所 在 地   | 山梨県北巨摩郡高根町箕輪字海道前 1370番地  |
| 位 置     | 北緯 35° 49' 15" 東経 138° 25' 55"                                   |
| 調査期間    | 昭和56年7月1日～昭和56年7月31日   |
| 調査面積    | 2,000 m <sup>2</sup>   |
| 調査原因    | 県宮は場整備事業   |
| 主な時代    | 平安時代   |
| 主な遺構    | 平安時代住居址 3軒   |
| 主な遺物    | 土器部、須恵器、灰釉陶器、縄文時代中期土器・石器   |
| 特殊遺物    | 墨書き土器、四耳壺  |
| ふりがな    | あおきいせき   |
| 所 収 遺 跡 | 青木遺跡   |
| 所 在 地   | 山梨県北巨摩郡高根町村山北割字青木 938地   |
| 位 置     | 北緯 35° 50' 10" 東経 138° 25' 45"                                   |
| 調査期間    | 昭和56年8月1日～昭和56年10月31日  |
| 調査面積    | 8,000 m <sup>2</sup>   |
| 調査原因    | 県宮は場整備事業   |
| 主な時代    | 縄文時代後期   |
| 主な遺構    | 縄文時代後期住居址14軒、石棺状遺構20基、配石遺構2群、集石遺構3基                              |
| 主な遺物    | 縄文時代後期土器・石器  |
| 特殊遺物    | 腰飾り、石錘、浅鉢土器、石棒、土偶、耳飾り  |

高根町埋蔵文化財 第12集

平成10年3月24日 印刷

平成10年3月31日 発行

## 海道前遺跡

## 青木遺跡

発行所 高根町教育委員会

印刷所 アートプリント社

